

# 第7回 銀華文学賞発表

## 銀華文学賞

銀華文学賞もおかげさまで七回を重ねることができました。今回もまた日本全国およびアメリカ、インド、ブラジル、フランス、中国など海外から、三八三篇の作品が寄せられました。心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今回は特に歴史小説に優秀な作品が目立ったことから、歴史小説賞を新設させていただきました。

また本年も故河林満を偲んで、御遺族の御厚意により河林満賞を選出させていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は四〇号以降に順次掲載させていただく予定です。御期待ください。

第七回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一一年一月二十三日（日曜日）午後二時より東京の日本出版クラブ会館にて「文芸思潮」エッセイ賞・現代詩賞授賞式などといっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第八回銀華文学賞も昨年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様様の御応募を心からお待ちしております。

※選考に当たり、森本等氏、都築隆広氏にも多大な御協力をいただきました。

### 当選

「茜色の軌跡」

高橋惟文（山形県山形市）

河林満賞

「逆光の海」

坂上弘之（熊本県八代市）

優秀賞

「骨肉の町」

冴場 渉（千葉県旭市）

「死んだ男」

丸山 史（大阪府八尾市）

## 歴史小説賞優秀賞

「小田原征伐余話」

久保協一

（岩手県盛岡市）

「テレビリター―ある異客の喪―」

佐涛崇生（北海道札幌市）

「さようなら『私』」

菅谷春子（千葉県浦安市）

「遠足侍」

龍造寺

信（アメリカ・カルフォルニア州）

「さきしままる」

柳瀬良行（鹿児島県鹿児島市）

「橋はいずこに」

富田鈴子（愛知県名古屋市中）

「風の街」

有森信二（福岡県太宰府市）

「不条理な日々」

原マサコ（千葉県市川市）

「プライド」

待木 啓（兵庫県三木市）

「打つ女―尚子―」

古川サト（神奈川県大和市）

「引き渡し」

神通明美（富山県富山市）

「少年の鏡」

二宮英郷（東京都渋谷区）

「虹の魔窟のブローカー」

李耶シヤンカール（インド・オリッサ州）

「三色もみじ」

鈴木英夫（東京都小金井市）

「花見」

有村尚一（東京都江東区）

山本憲明（福岡県福岡市）

「雛の記憶」

平沢裕子（岩手県花巻市）

「美しくない惑いの年」

小笠原 新（山形県酒田市）

「チットールガルの残照」

読後感がずば抜けて良い

大高雅博



当選作は「茜色の軌跡」高橋惟文に決まった。最終候補として読んだとき、これが当選作と思つた。高橋さんは第一回銀華文学賞で、優秀賞を取っている。それは題材が良かったものの、軽い文体とエンターテインメント的作品というところで、重いテーマの純文学的作品と比べると分が悪かったわけだが、それを今までも貫きとおしてきた。そして、今回は題材ではなく、小説として、前よりも格段に旨くなっている小説の力だけで当選した。軽い文体とエンターテインメント的な作品であり、いつものように読後感がずば抜けて良い。正直に言えば、選考会で推すのは僕一人ではないかと考えていたが、もう一人、強く推す人がいて、決定した。いつものとおり、意見は分かれたが、作品にとっては、そういうものの方が良い場合が多いのも事実である。

僕は、もう一つ、重い内容を持つ物を、合わせて当選作としたらどうかと考えていた。佳作となつた「同行二人」

和泉孜である。「アスベルガー症候群」を主題にした作品で多くの人に読んでいただきたいと思つたのだ。しかし、そのことが、逆に説明的過ぎて、小説になつていないという意見が強く佳作となつた。もう一度、練り直して、再度の挑戦を期待したい。

「死んだ男」丸山史は、結婚はしなかったが、関係が続いてきた男の自殺を巡る話であるが、その距離感のようなのが良い。

「プライド」待木啓、「不条理な日々」原マサコは、それぞれ、不可思議な魅力を持った作品で印象的であつた。

「少年の鏡」二宮英郷、「三色もみじ」鈴木英夫は、後は細部の詰めだけだと考える。

問題になつたのは「遠足侍」龍造寺信である。この作品だけではなく、下読みの段階でも、時代物、中国物がありよく調べた作品が多いのだが、評価が難しいのだ。この作品は侍がマラソンをするという、面白い作品なのだが、江戸時代の庶民は、走らなかつた、又は走れなかつたという。だから、飛脚のように、走ることで特別な能力として認められた。では、武士は走つたのだろうか、作品とは別のところで、引つかかつてしまう。時代物などは別で考えるということに僕は賛成である。

話はそれるが、昔、高校の頃、大江健三郎の「万延元年のフットボール」を読んだとき、一番衝撃的だつたことは、

佳作

- 「靖国神社の白い鳩」 鷲尾統一郎 (東京都足立区)
- 「親父のスポットライト」 岡野弘樹 (兵庫県加古川市)
- 「謎つばき女波町」 齋藤澄子 (徳島県鳴戸門市)
- 「二十六夜の月の出」 来の宮あんず (東京都江東区)
- 「黄泉への饓」 峰丘陵一 (奈良県奈良市)
- 「逃げた女」 桜庭チエ (東京都葛飾区)
- 「茜いま増す」 竹内菊世 (徳島県徳島市)
- 「イーストリバー」 矢原繁長 (兵庫県神戸市)
- 「青い屋根の家」 小梢 (東京都世田谷区)
- 「マナグアの恋風」 千葉安雄 (東京都足立区)
- 「同行二人」 和泉 孜 (大阪府東大阪市)
- 「櫓」 武藤蓑子 (東京都多摩市)
- 「赤い車」 小林理樹 (東京都小金井市)
- 「タクラマカンの女」 風吹薫 (愛知県名古屋市)
- 「波高く、海鳴りきこえる」 吉田はるみ (福岡県福津市)

河林満賞の創設JUNSN

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」

文芸思潮

だった。封建体制が崩れたのだから、明治になって一揆がおこるのは不思議だったのだ。小説のなかではその回答はなく、長い間疑問に思っていた。最近、江戸の研究が進んでいて（講談社から出ている新しい日本の歴史書など）、どうも、江戸の農民は考えているよりはかなり余裕のある生活をしていたらしい。天保とかの大飢饉は実際に起きて悲惨な現実があったのだが、ある東北の藩では、領民を助けられるほどの米の備蓄があったらしい。ただ、商人に多額の金を借りていて、米はそのために商人に渡さなければならなかった。それは、冷夏による天災ではなく、人災ではないかと言う。結論的に言えば江戸時代の農民の年貢はそれほど高くなかった。明治に入って富国強兵政策のために、農民の税金が高くなりそれで、農民達は一揆を起したのだ。そして、僕達がテレビなどの時代劇ですり込まれている悲惨な農民像は江戸ではなく、大正、昭和初期の頃に近いのではないか、と思う。というわけで、長年の疑問は解消されたのだが、時代劇、時代物については、例えば、その頃の人々の生活を忠実に描くか、または、それらを、現在の問題に置き換え、歴史的なものを歪めてもそのために使うかという疑問は残る。「水戸黄門」に多くの人が共感してきたというのは、現在が余りよいものではなく、勧善懲悪の世界ではないと感じている人が、印籠一つで、正義が実行されるようなそういうものを期待している。

と歴史小説賞優秀賞「遠足侍」である。

高橋惟文氏の「茜色の軌跡」は、四十近くになった独身男性の恋愛の成就譚だが、女性にとつての初恋の相手への一途な思いが、純粹な姿で立ち上がるところに、真つ直ぐな感動がある。このひたむきさや、清らかな姿は、単純であるがゆえに、人間の真性の持つ本来の輝きを開き示してくれる。運命を貫いて信じ切り成就することの、深さと美しさがここにはある。これは逆に一方で我々の日常の猥雑さをも照射してくる。汚れた現実や複雑な社会の軋轢、折り重なってがんじがらめになった現代生活の諸相は、あまりにも幾重にも我々を取り巻き、何かを見えなくしている。希望や夢の成就などはこの世界にはないと諦め、うなだれている。この小説はそれらを鮮やかに切り裂いて、きわめて単純な貫く思いのまぶしい光を我々の奥底に射し込ませてくる。この読後感のよさは、今回の全応募作中傑出したもので、真つ直ぐな快さには、無条件で拍手を送りたい。何度も応募して挫折感も味わっているはずの筆者が、奮起しての快挙である点も、輝きを増している。

いつも歴史小説はいい作品が何篇か応募されてくるが、舞台が現代を離れていると、どうしても注目を集めにくく、最終決定で不利になるケースが多かった。せっかくの優れた歴史小説も他の現代小説と同じように光を浴びてほしいということ、今回他の選考委員と協議し、歴史小説の分

つまり、あくまでも現在の話で、現在の願いとして見ている。作る側も、そういう思いがある。そうすると、時代物というのは、その時代にたくして現在を語るのか、それほど、歴史に忠実ではなくても良いのかというような問題が残る。かなり横道にそれてしまったが、資料を集めるのは必要であるが、それをどういう風に使うかは、微妙な問題、特別に神経を使う所なのだ。

また応募者の健闘を望んでいる。

## 真つ直ぐな感動

### 五十嵐 勉



今回の銀華文学賞はこれまでとは異なった色彩を帯びた。上位を占めた作品が、シンプルな明るさを示していたからだ。熟・老年の重く暗いテーマから離れ、希望の色を呈していた。樂觀的と言えば樂觀的だが、しかしその調和的なストーリーの展開は、一つの方向を追う強さにおいて、十分説得性を持つものであり、快い世界を切り開いていた。特にその印象を得たのは、当選作の「茜色の軌跡」

野を特に新設して賞揚することにした。その第一回目の優秀賞として、龍造寺信氏の「遠足侍」と久保協一氏の「小田原征伐余話」が選出された。「遠足侍」は城主の一言で行なわれた「遠足（マラソン）」で、一位、二位を得ようとしていた兄弟が、途中で人助けのためにマラソンを放棄した顛末を軸に描かれているが、人情味に富んだ明るいエンターテインメントは、楽しませてくれる。これもおよそ屈託や苦悩とは遠い、明るい小説で、気持ちのよいテンポで進んでいくストーリーは快適である。さわやかな読後感、やや都合のよい現代性との重なりを持ちながらも清涼さを味わわせてくれる。

「小田原征伐余話」は秀吉の小田原征伐と同時に行なわれた東北の裏の平定事情を素材にした歴史小説だが、重厚な筆致に加え、史実の重さや調べの綿密さではこちらに軍配が上がる。津軽地方の事情によく通じた詳細は見事で、地元の筆者でなければ書けない領域である。津軽家の起こりもよくわかるし、伊達政宗の抑えとした事情もつまびらかにされて、歴史小説を読むことよって過去への知識が深まる妙味も堪能させてくれる。着実な文章は歴史の古色の味わいを深めている。

河林満賞は、坂上弘之氏の「逆光の海」が選ばれたが、行政の組織で働く人間の苦悩が真摯に彫られており、その筆致は誠実な人間性に裏打ちされている。家族の人物が生

きていず、それが全体に効果を減じているが、それを差し引いても真面目な問いかけは胸に迫ってくるものがあつた。この真摯さを買いたい。

冨場渉氏の「骨肉の町」は兄弟の間の溝と憎しみ合いを母親の死を通して描いたものだが、故郷を捨てた主人公の家族内の心理の離反や弟との性格的な違和はよく剔出されていて、「骨肉の争い」の底に潜む愛憎のドラマを見事に構築している。心理の深さを抉ることでは今回の応募作中抜きん出ていた。ここにはたんに兄と弟という肉親の構造だけでなく、都会と故郷、捨てていくものと捨てられていくものとしての、現代の本質的な社会構造が結果的に象徴されている側面も見逃せない。

裂かれる構造としては、神通明美氏の「引き渡し」も現代の人間関係の法の場合からの亀裂をよく描いていて、その断面の切り取りには鮮やかなものが残つた。地味であるが、氏が経験し、見聞してきた世界の声を継続的に書き表していったほしい。法と人間の間を埋める作業は文学しかできない行為と思う。

今回、外国を舞台にした作品が多かつたことも、全体の明るい色調を助けていた。奨励賞の「虹の魔窟のブローカー」(李耶シャンカール)、「テリビリターある異客の喪」(佐濤崇生)、「少年の鏡」(二宮英郷)、「チットールガルの残照」(小笠原新)、佳作の「タクラマカンの女」(風吹

奨励賞の「さきしままる」(柳瀬良行)は冥界との境目に迷う話で、独特の雰囲気はスリラーとしてぞっと迫つてきた。死の側の呼び寄せはきわめて説得力のあるもので、それは自然界のあちこちにいまも口を開いている普遍的なリアリティを体感させてくれた。私は優秀賞でもよかつたと思つている。

今回は優秀賞と奨励賞、佳作の間の差はほとんどなく、まれに見る混戦で、印象に残る作品、力のある作品がたくさんあつた。その意味では、全体の賑やかな活気は一つのパワーとして熱く渦巻いている。

残念ながら奨励賞にとどまつた古川サト氏の「打つ女―尚子―」の女性主人公も強烈に脳裡に焼き付けられているし、平沢裕子氏の「雛の記憶」も、地味だが、奥行きのあるいい作品と思う。これらは、もつと評価されていい作品である。吉田はるみ氏の「波高く、海鳴り聞こえる」も近く人の潮騒のような生命の引いていく音が聞こえてくる。小林理樹氏の「赤い車」の女性も、原色の車の疾走が鮮やかに胸奥をよぎつた。

これらの賑わいは現今の商業誌には見られない活気で、この方向にそのうちさらに驚嘆するような高峰が出現する期待を抱かせる。間口を広くし、目を凝らしてそれも待ちたい。

薫)、「マナグアの恋風」(千葉安雄)、「イーストリバー」(矢原繁長)などの作品は、インド、イタリア、ブラジル、中央アジア、ニカラグア、アメリカと、全世界に及んでいる。こうした行動や舞台の広がりも、豊かさを示している。どれも個性的であり、その地の色を反映して、多彩な世界像を示していた。これは銀華文学賞にとって歓迎すべき傾向であるし、シルバー世代の展開力・行動力として期待したい領域である。

そのなかの一つ「テリビリターある異客の喪」は、芸術家の奔放な世界の影を引きずる家族の内面劇を、聖職を目指す青年の異国での自殺に重ねて辿るストーリーだが、血みどろの内面劇と合ったバロック調の文体は異色で、明らかに一つの世界を開示している。私は優秀賞に推したが、叶わなかつた。結末が、もつと劇的であれば、はるかに輝きを得ただろうと惜しまれる。

また「チットールガルの残照」は炎の燃え上がる世界に独特な迫力と吸引力があり、書かなければならない内面的な必然性が感じられた。最後の、妻が炎に身を投じるところで、突然の事件としてではなく、内面の情動をしつかり立ち上がらせたなら、より凝縮された結末になつただろう。これも惜しまれた。

「タクラマカンの女」も雰囲気のあるよい小説で、不思議な余韻があつた。

## 一行にかける真剣の度合い

### 小浜清志



人は何故小説を書くのだろうか？人それぞれの理由があるだろうけれど、わたしの場合は簡単な話、小説を書くことでみんなの注目を浴びたいと言う自己顕示欲であつた。

沖縄の石垣島から高校卒業と同時に上京し、いろいろな職を転々したあげく、わたしは生きることになった。どうやって自分の人生を終えればいいのか。二七歳になつていし、子供も二人いた。約半年の間、蓄えて食いつなぎ、どう生きようかと考えた。今から思えばばかな悩みであつたが、あの時期を経てわたしは決心をした。一度きりの人生だ、思いきり好きなように生きていこう。そして小説を書こう。その決心がその後の人生の波乱をよんだが、後悔はなかつた。

四、五年で新人賞くらいは獲れると思つていたが、投稿しても投稿してもまつたくかすりもしなかつた。作家になろうと決めて七年がたち三五歳になつた自分がとてつもなく惨めだつた。そして、七年の歳月がすべて徒労にみえた。もう一年だけ頑張つてみて結果がでなければ潔く夢を捨て

よう。その時から原稿用紙に向かう姿勢が変わった。もう後がないし一年限りである。

その一年に劇的な変化が起き三七歳で文学界新人賞を受賞し二度の芥川賞候補となった。作家としては申し分のない肩書きを得たと感謝している。

劇的な変化とはなんだったのか。振り返ってみれば一行にかける真剣の度合いが深まったことであつた。この文章はだれに見せても恥ずかしくないか、プロの文章になつてゐるか。それまでは書きあげることには目が行き、どうせまだ未熟だという甘えがあつたのだと思う。その甘えを排除してみると、集中方が一気に加速した。ある夜、自分の原稿を読み返して、初めて自分がうまいと感じた。

何十枚書いても気に入らなければ捨てる勇氣も出てきた。過去になかつたことだつた。そして、飛躍的な成長を自分が一番感じ作家になれると確信できるようになつていった。

第七回になる今回も、読んでいて、もう少し注意すれば劇的に変わるのに、と悔やまれる作品が多かつた。

しかし、当選作になつた「茜色の軌跡」は本当に感動したし、うまい作家である。過去に読んだこともあつたが、筆力も冴え、サミーがステージから駆け寄ってくるラストは予想していたが、小説の醍醐味を味わせていただいた。

「死んだ男」は優秀賞を受賞された作品で、二〇年くらい

登場人物にまつた接点はない。あるのは高幡不動の境内にいる人たちというだけであるが、おのおのの視点から同じ風景をとらえていくなかで見えてくる人生模様が心に残つた。文革に破綻もなく一気に読み上げた。つぎの作品にまた期待したい。

「雛の記憶」は人口七千人余という東北の過疎の町が舞台である。同級生であつた真澄の兄と結婚し未だに彼女とも一緒に住んでいる。その彼女の心の崩壊を一定の距離をおき淡々と描き、以前榮えていたとき飾られていた雛人形との記憶をからませた傑作である。

「不条理な日々」——不思議な作品である。老婆のつぶやきが軽妙で楽しいと思わせておいて、後半の迷路への入りかたが実に巧妙である。

「花見」——この作品も「骨肉の町」とおなじく近親者との葛藤をえがいたものである。危篤状態の父を病室に残したまま友人と約束していた京都の花見に出かけようとする達郎に姉たちが反対をする。主人公と女の目線とのちがいが作品の興行きを出している。

「チットーラルガルの残照」——特殊な舞台と異様な物語に引き込まれた。断片的なすじ運びではなく、どこかに細かい描写があつたらよりいい作品になつたのではと悔やまれる。

「美しくない惑いの年」——構成に難があるけれども、障

関係をつづけていた男との回顧であるが赤裸々ともいうべき表現にやささか驚いた。

「わたしのような女を世間では、下半身のだらしない女と決めつけるのでしょうか。三十半ばのわたしは単純に発情していたのです。娘との暮らしを平穩に過ごすために、自分の中に溜まった欲情のガス抜きが必要でした。この時ほど、自分が動物だと実感したことはありませんでした」

女であれ男であれ、ひそかに抱いている欲情をこども明確に書かれると、拍手を送りたくなつた。そして、死んだ男のことを愛情をこめて回顧する主人公に共鳴した。

「骨肉の町」は優秀賞を受賞された作品で、二歳年下の弟との、母の死をめぐる骨肉を描いた内容である。近親者であるが故の愛憎はいたるところで繰り返されていゝるであろうが、こういう作品としてみせつけられるとやはり身につまされるものである。

「逆光の海」——税をとりたてる者の辛さと悲しみが切実に伝わってくるいい作品だつた。河林満賞を受賞されたが、生前の河林を知る者として、この作品と河林が重なつてみえた。多分、河林ならあまりいい評価をしないと思うが、わたしは、ラストの主人公がさびれた集落に立ちすくむ光景が深く印象に残っている。

以下、奨励賞になられた作品であるが、わたしは「三色もみじ」にいたく感心した。真奈美、武志、英美、という

害者の不安と焦りをきちんと描こうとしている。

「少年の鏡」——兄と妹の関係を軸に、日本から外国までの大胆な旅に羨望を覚えた。

勝手な選評でしたが、これだけの作品が今回も寄せられたことに驚きました。また次回、いろいろな作品に出会えることを楽しみにしています。

## 物語の效能

### 小沢美智恵

銀華文学賞も七回目を迎えた。

当選作の高橋惟文「茜色の軌跡」は、エンターテインメント系の作品で、純愛の話である。わたしは甘すぎる気がしたが、満点をつけた選考委員が二人おり、これまで純文学系の作品にばかり賞を与えてきた当文学賞の幅の広さを示すいい機会でもある



という意見に説得されて、受賞に同意した。

賛成してみれば、汚れを知らない主人公二人のさわやかな話で、一種のおとぎ話ではあるが、今の日本にはそのおとぎ話がほしい現実があるのかもしれないと思つた。

たとえばつらい現実を目の前にしたとき、その現実をどうにか受け入れられる形にするのが小説の効能とするなら、この作品の甘さは必要な甘さとして創り出されたともいえるからだ。

丸山史「死んだ男」も、自殺した永年の恋人の死を乗り越えるための物語と読める。甘さはみじんもなく、現実との絶妙な距離の取り方、自己の内面を見つめる目の確かさがみごとで、わたしはすぐれた小説として評価したが、支持しない選者もいて、惜しくも優秀賞にとどまった。

現実を乗り越えるための物語としては、冴場渉「骨肉の町」も当てはまるかもしれない。母の死にまつわる弟との確執を描いてすごみがある。小説の体裁としてどうなのかと問われれば、決して整っているとはいえないのだが、作品の中に、語られるのを待っている怖ろしい物語があるのを確かに感じさせる。

また、エンターテインメント系といえ、龍造寺信「遠足侍」が文句のない出来で、読みやすく、応募作中一番の手練れと思えたが、歴史小説として見るとき、そこに書かれている内容が事実といえるのかどうか疑問を呈する委員がいた。

過不足ない出来という点では、鈴木英夫「三色もみじ」にも触れておきたい。真奈実、武志、英美という三人の登場人物が、ロンドのように、高幡不動という場でそれぞれ

この賞の選考の二週間ほど前、四国徳島の三好市に行ってきた。全国同人雑誌の優秀賞を決める「富士正晴賞」に立ち合い、また我が全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の公



開選考会に選考委員として参加してきたのである。風光明媚な大歩危おおほけの渓谷の美しさと、町おこしの懸命さと、そして全国から百数十人の同人誌への思いのある方々が集まり、なかなかの活気が感じられた。人間のエネルギーが高まるのは、まさに人間が密に集結することである——と再認識させられた。

さて、今回の銀華文学賞は、作品提出にお金がかかるようになったせいとか、少し量は減ったものの、内容的にはレベルが上昇してきているのを感じる。

まず当選作は、「遠足侍」だと思った。この方は職業欄に作家と書かれてあった。経歴はよく分からないが、エンターテインメントの大賞を受賞した過去があるようだ。ようやくある意味でプロの文章が参加登場してきたと言える。これは今年からだという歴史部門の優秀賞になった。フィクション的要素がかなりある時代のもの。

小藩である安中藩。江戸の大火のため藩内の杉の木のお蔭でかなりのもうけを得る。しかしそれによって起こった気の緩みを一掃する——という藩主の思いで、一三歳から

の人生を語り、その声が重なり合うことで独特の味わいを引き出している。奨励賞にとどまりはしたが、わたしは薄味ながら佳品だと感じた。

また、他の委員には支持されなかったが、わたしは感心した作品に、鷲尾統一郎「靖国神社の白い鳩」がある。靖国問題というむずかしい題材を、右にも左にも振れることなく注意深く描いた手腕はなかなかのもので、洗脳という問題も深く考えさせる。

その他、菅谷春子「さようなら『私』」、二宮英郷「少年の鏡」、原マサコ「不条理な日々」、佐濤崇生「テリビリタ——ある異客の喪——」、桜庭チエ「逃げた女」がそれぞれ独特な味わいがあつて、印象に残った。

応募された作品を読むと、今さらながら小説は現実のなから生まれくるのだと感じる。つらい現実を、どうにか受け入れられる形に変えて差し出したとき、物語が生まれ、作者はその現実を乗り越えられるのだという気がした。

## 歴史小説とエンターテインメント

### 八覚正大

五〇歳までの侍がすべて参加することになる遠足ととおし(マラソン)の話。ある兄弟が主人公だが、欠場となればその代わりに金を出さなくてはならないとか、出たからには賞金を狙いたい……といった思惑がいろいろ絡んでくる。マラソン、ロードレース……といってしまうまでもだが、それに参加する者たちの気持ちがよく描かれている。

優勝候補の兄弟は、しかし途中ヨシの茂みの向こうに浮いていた藁舟の中に捨てられた赤子を見つけてしまう。ここからヒューマンな兄弟の誠実さが描かれ、そして赤子の母親が見つかるのである。兄の縁談は壊れるが、しかしその誠実な人柄に家老の娘が惹かれていく……と言う結末。ストーリーだけ書けば「お話」と思われるかもしれない。しかし、これが日本におけるマラソンのルーツでは！と思わせられてしまうし、情を揺さぶるディテールがしっかりと描かれ話の構成が見事だ。

歴史部門の優秀賞もう一作に触れる。「小田原征伐余話」は、小田原征伐に出陣を余儀なくされる、これも小藩の悲しさと勇氣、方略が描かれている。南部と津軽の争いの中、とにかく小勢でかけつける者と、手勢を引き連れては来たが、だいたい遅れての者……と、その違いがよく出ている。

「遠足侍」に比べると、核心に行く前が少し分かりにくい感じもあり、名前や地名の漢字が読みづらくわずらわしい気もするが、よく調べ、そこに臨場感を持たせて描いてあ

ることは評価に値しよう。何より小藩の命運がよく描かれている。

さて、当選作の「茜色の軌跡」は、法学部の学生が、大学の図書館に調べ物に來た中学生の女子と「メモごっこ」を始めた——という過去の回想がある。それも図書館の「法学喫茶室」という本にメモを挟んでの——。夕立せきたてという主人公の名前は面白い。それから時間が経ち、主人公は準教授になる。少女も家族とアメリカへ行き西洋医学史を勉強したりする。やがて美しい女性になり、二人は再会し結ばれるというお話。作者は第一回の銀華文学賞から精力的に作品を出し、エンターテインメント系の作品に秀でている。

今回、二人の選者がそのうまさやエンターテインメント性に徹した感覚を高く評価した。しかし中学生だった少女は、当時「死刑」の問題のレポートを考えていた。その後外国で西洋医学史を学んだ設定にもなっている。それらはどうなってしまったのだろうか……。それらに関係なく、ただ大学生と中学生の出会いがあり秘密の文通があり、そしてやがて二人とも功なり結ばれると——言う——お話。「あしながおじさん」などを連想もしたが、世界は明るく閉じているだけの気がする。第一回の時の「箔押し異聞」の方がはるかに読ませた。それでも様々な細部の工夫は評価したい。

私が読み応えを感じた純文的なものは「花見」と「美し

る。ストーリーがいにまなりかけるが、ナースの疲れ切った姿に（運よく）気持ちも覚め、そしてキックボードに不自由な足を乗せ、病院のリハビリ・センターをどうだと言わんばかりに——駆け抜けていく主人公の姿は生き生きとしている。人間性の復活がここにある。ユーモアがあり、行き過ぎず人間の裏と表を描いてある。

ただ、私以外の評者は、ナースの視点、医者視点、そして主人公の視点がバラバラであると批判的な見解だった。皆実というリハビリ男性の視点でまとめるか、あるいはナースの視点にした方がやはり読者には分かりやすかっただろう。しかし、ここには医療する側とされる側という、固定された傾斜性に対する人間の反抗と回復への普遍的テーマが見える。だいたい異なるとはいえ、昔見た映画の名作「カッコーの巣の上で」という精神病院の患者たちの反抗とその挫折を思い出した。

以下は、思いついたまま、感想を述べたい。  
「少年の鏡」いつも力作の作者だ。ただ、思うに任せてその場を描いていく手法なので、分かりにくさは否めない所もある。それでもいつもはセックスが中心になるが、今回は妹の鬱を治したいというテーマがあり、バンジージャンプへ向かっていくラストなど、ある種感動をもって読めた。

「骨肉の町」かつて場末の女や家族のことなどをどこか

くない惑いの年」の二作だった。前者は父親の最期に臨む姉たちと男性主人公の葛藤である。主人公は仲間とお花見の企画を立てていて、父親を取るか花見へ行くか迷っている。それだけ読むと、親の死に目が近いのに不謹慎だ——と思われる読者もいるだろう。しかし、実は評者はそこに現実のリアリティを感じるのだ。泣きだし非難する姉たち（母親はずっと昔に亡くなっている）のいろいろな思いの吐露もよく描けている。主人公は結局、お花見に行く、そして帰ってきてから父親は逝く……命とは、人間の関係によって変化するようでもあり、しかし寿命とは思いつまとは関係なく自然にあるもののようにも……評者もさまざまな思いの果てに父母を看取っているので、この作品のリアリティが見えたのかもしれない。

一方、「美しくない惑いの年」は、リハビリに励む中高年男の視点からの、ナース、医者たちの医療体制への反抗の「まなざし」である。医学が発達し、医療の水準が上がった現代であるからこそ我々は延命するのだが、しかし対象化され、個人の尊厳・プライドを損なわれていく事実もある。それをクライアントの側から描いたのがこの作品であり、私は高く評価した。ナースの裏と表。医者同士のプライドの投げ合い。医者が医者に送った署名入りの本を主人公は古本屋で見つけ、しかもその中に件の気に入ったナースの手紙が挟まれていた——なんて面白くも作ってあ

ニヒルな男の視点で描き、私は評価していた作者だ。今回は実母の急死と実母と暮らしていた異様な弟の姿を描いている。生々しい感じや弟の病理は伝わるが素材が未消化のまま、何をテーマとしたのかを明確にしてほしかった。タイトルの顔に比べ、身体が未発達の気がした。

「プライド」は、気位の高い女性が、なぜか施設に連れて行かれる話。なんだろうと読んで行くうちに、もうだいぶ認知症の入っていたことが分かる。ラストの社交ダンスの幻想のシーンとどんでん返しがなかなか見事。

「青い屋根の家」お手伝いのサキさんのどこか異様な感じがけっこう描けている。しかし、心を病んだような主人公の理由がいま一つ明確でない気がした。

「打つ女—尚子—」学生時代の仲間と雀荘の話。不思議な女学生。暴力とセックス描写はなかなか。  
「死んだ男」死んだ男への思慕を淡々と綴る。その距離を置いた視点が文学になっている。

「不条理な日々」ボケて行く女性の視点からよく描けている。しかし、タイトルのみならずカミュまでを持ち出したところがあまりに意図的。  
「橋はいずこに」ある種、姥捨ての話。しかしこの姉妹の少女の優しさ、健気さがいい。そして橋を渡ったお婆さんが、向こうで生きていて逆に飢饉の村を救う設定も悪くない。

「虹の魔窟のブローカー」 旅人の目ではなく生活にまで入って見るインドの様子が描かれている。ブローカーの頭であるアリもよく伝わる。しかし、自殺を企てたアリの妻がよく分からない。

「二十六夜の月の出」 二十六夜に阿弥陀様が見える、というお祖父さんと孫娘との対話。なかなかほのぼのとしている。

「逆光の海」 収納課員の生活。苦しみとヒューマンな点は素直に描けている。

「チットールガルの残照」 旅先の悲劇をうまく伝えていく。

「雛の記憶」 狂っていく夫の妹の様子は描けているとして、この主人公がなぜ覚悟を決めていくのか、そのリアリティが伝わってこなかった。

「黄泉への餞」 ラジコンのヘリコプターを操縦し、孫を殺した暴走族に復讐するというテーマと、その細部の手はずなどよく描けていた。しかし、主人公の怨念はあまり伝わらず、さらに暴走族せん滅への、倫理観のぶっ飛んだ意欲の方が見えて、どこか、あれ、あれ……。

「風の街」 自家中毒、いじめは描けている。迫力もある。ただ、平安初期の葬送の跡の家を建てたから……というの、何をテーマにしたのか分からない。

「櫓」 妻の葬送への素直なレクイエム。



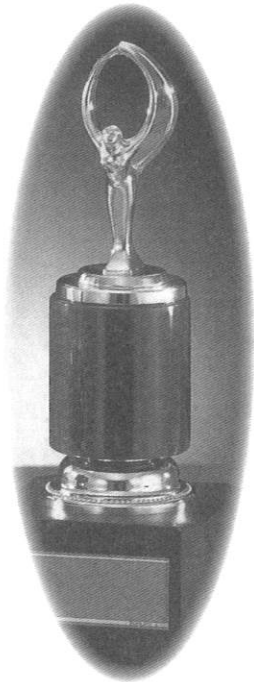
選考会風景

「羽子板」 薄倅な女子との出会いを支えに生きる男性の人生。

「靖国神社の白い鳩」 なかなか難しいテーマに取り組んでいる。しかし、白い鳩のイメージがテーマ未消化なまま終わっている。

「同行二人」 アスベルガーの青年を、お遍路と結びつけたのは面白い。が、その説明に終わり、かつ臭わせた部分も伝わってこない。

現代の矛盾に気付かせ人間性を高く回復させるテーマ、細部にまでみずみずしい感性を注ぎながら、したたかなユーマアとともに感動を湧かせる作品を、さらに読んでみたいと思っている。



## 文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞 授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様 今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できます。楽しい文学の集いとしたいと思います。どうぞお気軽にご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十三年一月二十三日(日)

授賞式午後二時より／祝賀会・新年懇親会五時半より

会場●日本出版クラブ会館

東京都新宿区袋町6

TEL03・3267・6111

※JR「飯田橋」駅より神楽坂8分

地下鉄大江戸線「牛込神楽坂」駅A2出口2分

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮

TEL03・五七〇六・七八四七 里見・富久田・五十嵐まで

または090・八一七一九七七一まで



## 第8回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

### ●●募集要項

**募集内容**●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

**応募資格**●2011年6月30日現在において45歳以上の者

**応募規定**●400字詰原稿用紙50枚以内（20枚くらいでも可／原稿用紙の場合は必ずA4原稿用紙を使用。B4は失格）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと（コピーを応募するのが望ましい）。※応募審査料1000円をお願いします。

別紙に①応募部門（2011年度第8回銀華文学賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格）⑤〒（ないものは失格）・住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記入。⑨応募審査料1000円を郵便為替（何も記入しない）で同封。外国からは11USドル。

応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

**応募先**●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

**賞**●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

河林満賞■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（数名）

奨励賞■賞状・賞メダル

※恐縮ですが応募審査料1000円を御協力ください  
ますようお願い申し上げます。

**選考委員**●作家集団「塊」メンバー

**締切**●2011年6月30日（当日消印有効）

**発表**●予選通過者は2011年11月末発売の「文芸思潮」43号に発表する。受賞作は2012年1月末発売の「文芸思潮」44号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

**主催**●アジア文化社

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

## 銀華文学賞選考委員プロフィール

### 小沢美智恵

おざわ みちえ

1954茨城県生まれ

千葉大文学部卒

出版社勤務

93「妹たち」で川又新人賞受賞

95評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

06「冬の陽」で千葉文学賞受賞

日本ペンクラブ会員

「消える島」、「後生橋」で芥川賞候補  
小説集『火の闇』（集英社）

### 八寛正大

はっかく まさひろ

1952東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒

教師・精神対話士

92「十二階」で新潮新人賞受賞

小説「零度の遊び」「イエロークラスタ」「父のフレーム」「カウンター」ヤルポ『夜光の時計』など

教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

### 大高雅博

おおたか まさひろ

1954石川県生まれ

日大国文学科卒

80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞  
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

### 五十嵐勉

いがらし つとむ

1949年山梨県生まれ

早大文芸科卒

79『流論の島』で群像新人長編小説賞受賞  
84-90タイ在住、カンボジア問題取材しながら東南アジアを遍歴

「東南アジア通信」「アジアウェーブ」を創刊、編集長

主著に『緑の手紙』（読売新聞インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』（健友館文学賞）他の小説作品に「ノンチャン、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある。

### 小浜清志

こはま きよし

1950沖縄県西表島隣の由布島に生まれる

69県立八重山高校卒業と同時に上京

劇団四季、沖縄海洋博などで、舞台裏方を務める。その後も様々な職を遍歴

87作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める

88「風の河」で第66回文学界新人賞受賞

### 作家集団「塊」メンバー募集

作家集団「塊」は、文芸思潮および銀華文学賞・まほろば賞などを通じて、新たな表現運動を展開する作家集団です。

河林満の逝去により、欠員が出ましたので、新メンバーを募集します。

「文学界」「群像」「新潮」「すばる」など新人賞またはそれに準ずる受賞経験者で、現在の文学状況を打破したい気鋭の作家の参加を期待しています。

参加を希望の方は「文芸思潮」内・作家集団「塊」事務局に御連絡下さい。地方の作家でも、参加可能です。また受賞歴がなくても「塊」準メンバーとして参加できます。作品・自己紹介文などを送ってください。

連絡先 TEL

03:57067847  
090:81719771

五十嵐まで

# 小田原征伐余話

## 久保協一

天正十八年（二五九〇）二月、石田三成は、京で小田原出征の準備に忙殺されていた。そんな中、突然、関白豊臣秀吉から火急の呼び出しがあった。

「三成、北の果てから女鬼が来たと言うではないか」

秀吉はすこぶる上機嫌であったが、三成は思いがけない下間に、言葉が出なかった。

「三成、どうした？」

秀吉は、そう言うと、大声で笑った。事の次第を素早く整理しなければならぬ。対応を誤ると、上機嫌が、一瞬にして不機嫌になる。

（多忙を極めているこの時期に、些細な陸奥の老婆のことなど、誰が殿の耳に入れたのか。上機嫌な理由は何か。そのことなる。）

「仰せのとおりにございます」

三成は、為信の擁護を避けた。

「ほう」

秀吉は、目を細めて三成を見た。旺盛な好奇心を刺激されたときの癖である。

「謀反人の身内に会った理由を申してみよ」

「過日、陣内を見回っていた家臣の一人が、数名の伴を引き連れた老婆の一行の旗印に気が付きまして、急ぎ、引き連れて参りました」

「天下の治部少輔に目通りを叶えた旗印か。女鬼の旗印なら、さぞかし恐ろしい紋所であったろうな」

秀吉は、甲高い声を立てて笑った。

「ん……？ どうした三成」

秀吉は、強張った三成の顔を興味深そうに見た。

「杏葉牡丹にございます」

三成は、秀吉の表情を確認しながら言った。

「……？」

一瞬、秀吉の思考が停止した。

して、女鬼と言った意味は何か——）  
「其の者なれば、津軽領主の母御と名乗る老婆にございませす」

「はて？ 津軽は南部の領地では……。又左が、陸奥の果てで謀反を起こした曲者がおると怒っておったが、其の者の身内の者か？」

（やはり、前田殿が耳打ちなされたか）

三年前、天正十五（一五八七）年四月、南部家の家老北信愛のぶちかが加賀の前田利家に拜謁している。手引きをしたのは、京の鷹商人田中清六だ。陸奥は馬と鷹の産地で、この時も信愛が逸鷹三十羽ほどを利家に献上している。信愛は、相当地策士との噂だ。利家が南部に取り込まれていることは、

「三成、今、何と申した？」

「杏葉牡丹にございます」

そう言いながら、三成は全神経を集中して秀吉の様子を伺った。

「ククク……」

秀吉は、腹の底からこみ上げてくる可笑しさを必死で堪えているかのようであった。

（母御の命、どうやら助かった——）

秀吉の目が冷たく光った。即刻、母御の首が飛んでいなくてはならぬ。

「牡丹の旗印なら、いかに多忙な治部少輔といえども、会わねばなるまい」

秀吉は、そう言って大声で笑った。

「はっ」と言って、三成は頭を下げた。

「仔細を申してみよ」

秀吉は、権力者の顔から物好きな好々爺の顔に変わって

いた。

「素性の知れない一行ではありませんでしたが、牡丹は前関白近衛前久公の御家紋、万に一つでも近衛家の連枝なら取り返しつかない仕儀と相成ります」

「そうか、それで」

秀吉は、子どもが夜話を急かすように先を促した。

天正十三年（一五八五）七月、秀吉は、近衛前久公の猶

子として関白宣下を受けている。この一行が近衛家の連枝なら秀吉と連なる者達ということになる。

「数名の共侍を従えた老婆は、前久公の添状を持参してございませうれば、津軽為信殿の母御に相違ないものと存じます」

「又左は、確か、大浦……とか申しておったがのう」

秀吉は、ほそつと言つて、三成の顔を盗み見た。

「為信殿は、津軽の堀越城主武田守信の子で幼名は扇、成人して大浦城主大浦為則の娘成姫の婿養子となり、大浦氏を継ぎましてございます。武田守信は大浦為則の弟のこと。その後、津軽を平定して津軽氏を名乗るに至つたと聞き及んでございます」

「まあ、大浦でも津軽でもよいわ。それで杏葉牡丹はどうなった」

三成は慎重に言葉を選びながら、説明を始めた。

「かつて、近衛尚道公が奥州遊歴をした折、津軽光信の娘阿久との間に生まれた庶長子が政信で、その子が為則、守信の兄弟とのことでございます」

近衛尚道は、前久の祖父である。為信の祖父が尚道の庶長子であるなら、津軽家が杏葉牡丹を家紋とすることは、十分にあり得る。

「地の果ての田舎侍が、近衛家の連枝とは、途方もない戯言よ」

「まあ、よい。渡りなら、京と繋がりがあるのも得心できるといふもの。だが——」

秀吉は、少しの間、眉間に皺を作った。

「素性の知れぬ、渡りを召抱えるとは。しかも軍師にじゃ。三成、其方にはできません」

秀吉は、そう言つて笑つた。三成は、苦笑して頭を下げるしかなかった。

「為信とやら、なかなか面白い奴よ。ところで、陸奥は、鷹だけでなく名馬の産地でもあるがのう」

秀吉は、にやりと笑つた。

「殿への献上として、選りすぐった鹿毛と蒼鷹、黄鷹を持参してございます。いずれも見事な名馬、逸鷹にございませう」

「近衛前久公をたぶらかし、儂までもたぶらかさうとする、その女鬼に会つてみたい」

秀吉が真顔で言つた。

「殿、それは——」

「何故、止める？」

「小田原征伐の陣触れは、奥州にも届いております」

「そのことよ。奥州の果てから、逸速く駆けつけたのであるぞ。奥州の冬は雪に覆い尽くされ、在るもの全てが凍て付くと云うではないか。まして、津軽は奥州の北の果て。そのような厳寒の中、老母が京まで辿り着いたのだ。関白

秀吉が真顔で言うと、三成は、思わず頭を下げた。

「なれど、壮大な戯言は愉快ではないか」

そう言つて、秀吉は快活に笑つた。

「その老婆、猶子の座も買ったか？」

秀吉は、含み笑いをしながら聞いた。

「仰せのとおりでございます」

「やはり、公家の猶子の座まで買ったか。前久公なら、金を積まれて快諾したろうよ。儂の他に公家の身分を買つた者がおつたとは、実に愉快である。しかも、為信が前久公の猶子なら、儂と義兄弟ということになるではないか。北の果てに儂の義兄弟がいたとはのう。その老婆、確かに女鬼かもしれん」

秀吉は、そう言いながら頷いた。

「三成、どういふことかのう」

少しの間を置いて、秀吉が眉間に皺を寄せながら呟いた。

「不可解に思わぬか。北の果ての田舎侍が、何故、前久公と誼を通じていたのだ」

「そのことなれば、軍師沼田面松齋の策と存じます」

「沼田面……？ 何者じゃ」

「素性はよく分かりませんが、さしずめ、渡り——」

「渡り——。修験者か？ 忍びか？」

秀吉が、三成の言葉を遮つて聞いた。

「しかとは……」

の威光が北の果てまで届いている証であろう。津軽為信の恭順、誠に殊勝と言わねばなるまい。その老婆、為信の実母なら代参を認め、所領を安堵するのに何の問題もなからう」

「仰せのとおり、奥州の諸侯に小田原征伐の陣触れを發しました第一の目的は、恭順を確かめることにございます」

「奥州は、未だ戦乱が治まってはおらぬ。老母の長旅、如何ほどの苦勞があつたことか。よう無事に辿り着いたものよ」

秀吉は、独り言のように言つた。

天正十四年（一五八六）、秀吉は三河の家康を懐柔するため、妹の朝日姫を正室として嫁がせ、母も家康の元に入質として送っている。その朝日姫は、天正十六年（一五八八）に母の病氣見舞いのため上洛し、そのまま京の聚楽第で病に伏し、一月ほど前に死去した。

秀吉は天下統一のため、母と妹を人質として家康の元に送つた。津軽為信は所領安堵のため、母を京に送つて寄越した。そのことで秀吉の心が揺れていることを三成は敏感に感じ取つていた。しかし、天下統一を目前にした今、情に流されることは許されない。

「津軽為信殿の恭順、微塵の疑いもございません。しかし、この度の小田原征伐の陣触れは、領主に参陣を命じたもの。代参を認めましては、その意義が失われてしまいます」

(女鬼の小倅、殺すには惜しい……)

天正十八年三月朔日、秀吉は京を出立した。都大路を埋め尽くした兵がゆったりと北に向かう。征伐軍とは思えない優雅な行列が延々と続く。二十七日には、小田原征伐の大軍が沼津の三枚橋城に到着した。秀吉が到着すると、本陣では早速、軍議が開かれた。

羽柴秀次、徳川家康、前田利家、織田信雄、福島正則、蒲生氏郷、真田昌幸など、有力な武将が顔を揃えている。小田原城を防御するため、北条氏によって築城された箱根十城のうち、山中城と韮山城を攻めるための軍議であったが、緊迫感はなく、旅の疲れを癒す慰労会のように陽気な笑い声が溢れていた。

「殿、津軽左京亮殿が到着してございます」  
「おお、北の果てから、女鬼の倅が来たか」

秀吉は、この上なく上機嫌であった。  
「即刻目通りを許す。連れて参れ。面……なんとか申した軍師もじゃ」

秀吉は、そう言うのと、居並ぶ武将をこの上もなく愉快そうに見回した。

「殿、津軽とは大浦為信のことにごさるか」

前田利家が顔色を変えて口を開くと、秀吉が手を上げて制した。

「又左がそこまで肩入れする信直とかいう南部の棟梁、如何ほどの武将かのう」

「三年前、南部信直殿は、重臣北信愛を使者として金沢城まで遣わし、殿に恭順を誓ってございます。その誠、この利家、感服いたしてございます。加えて、勇敢なる——」

「又左がそこまで言うなら、領主として申し分あるまい。だが、間に合うかのう」

利家が怪訝な表情をした。

「小田原征伐に参陣せぬ者は、領地を没収し、ことごとく撫で斬りにいたす」

前田利家の顔色が変わった。

「どうした、又左」

「南部では、謀反を企てている者がおり、信直殿はその平定に苦慮しております」

「謀反？ 領内の一揆ごときに手古摺るようでは、領主としての力量は知れたものよ」

「お待ちください。謀反を企てている九戸政実は、陸奥でも屈指の勇猛な武将」

「そうか、クノへとかいう輩、勇猛な武将であるか。津軽為信もなかなかの武将と聞き及んでおる。クノへと為信を相手に南部信直に勝ち目はあるか。又左、どうじゃ」

利家は言葉に詰まった。

「又左が誼を通じている武将なら、南部信直の恭順、疑う

「三成、津軽左京亮がどのような出で立ちで駆けつけたか、又左に話してやれ」

秀吉は、笑いながら言った。

「杏葉牡丹の幟を掲げ」

「又左、聞こえたか。牡丹の家紋であるぞ。即刻、会わねばなるまいよ」

秀吉は、せっかちに三成の話を遮って、満足そうに笑いながら言った。

「杏葉牡丹と！ 三成、それは騙りよ！ 大浦為信は南部の謀反人」

前田利家の顔面が怒りで引きつった。

「前田殿、お静まりください」

三成が利家の怒りをやんわりと制しながら言った。

「近衛前久公の添状によりますと、津軽為信殿は近衛家の連枝で、この度、猶子にしたと記されてございます」

「そのような戯言！」

利家が吐き捨てるように言った。

「前田殿、前久公の添状に相違ございません」

三成が強い口調で応えた。

「大浦為信は南部信直殿の家臣で、領地を奪った謀反人！」

利家が三成に向かって怒鳴った。

「まあ、待て、又左」

秀吉が、利家を制しながら続けた。

余地はなかるう」

秀吉が利家に語りかけるように言った。

「されば、関白殿下の惣無事令を蔑ろにし、陸奥を騒乱に巻き込もうとしている不屈きな大浦為信と九戸政実、なんとしても征伐せねばなりません」

利家は、そう言って、膝の上を拳で強く叩いた。

「又左の愚直さは、歳を重ねても変わらんものう。その又左と誼を通じておる南部信直を殺したら、僕も目覚めが悪くなる」

秀吉は、そう言いながら、三成に目配せをした。

「前田殿、津軽家が近衛家から杏葉牡丹の紋を賜ったことは、確かにございます。近衛家の連枝が杏葉牡丹の幟を掲げ、津軽の領主として参陣したことは、もはや動かしがたい事実。一方、南部信直殿は、未だ領内に留まっていますと聞き及んでおります」

三成は、穏やかな口調ではあったが、毅然と通告した。

「参陣というが、如何ほどの兵を引き連れて参ったというのか」

「総勢十八人」

「なんと！」と言って、利家が大声で笑った。

「十八人とは、なんたること！ 如何に陸奥は遠いとは申せ、二百や三百の兵を引き連れて参るのが領主の務めにござらう。十八人では、とても参陣とはいえますまい。

正に関白殿下の御威光を蔑ろにする所業！」

「それは、思い違いにございます。小田原征伐の陣振れでは、兵の数を問うてはおりません。小田原城を囲む兵は、既に二十万を越えておりますれば、二百や三百の兵が増えたとして、物の数ではありません。肝心なことは、時にございます。為信殿は、そのことをよくよく承知していればこそ、僅かの手勢を引き連れて馳せ参じたものと存じます」

利家は三成を睨んだが、反論はできなかった。

「津軽為信殿とて南部勢と対峙している中、自ら参陣するには相当の覚悟が必要。その覚悟が南部信直殿をお救いしたかもしれません」

「大浦為信が南部信直殿を救ったとは、如何なることか」  
利家が、語気を強めて問い質した。

「為信殿の留守を衝いて南部勢が攻め入れれば、津軽勢は滅ぼされることになりかねません。さりとて、参陣しなければ領地は没収となります。為信殿の生き残る道は、関白殿下の元に逸早く馳せ参じ、領地の安堵を受ける外はありません。領地の安堵を受けた後、南部勢が津軽を攻撃すれば、惣無事令に反することになり、南部は関白殿下の敵となります」

関白殿下の敵という言葉に利家の表情が変わった。それを確認し、三成が続けた。

「恐らく、為信殿は領地の安堵に全てを賭けたものと存じ

「は、はっ——」と言って、為信は、更に頭を低くした。

「右京亮殿、面を上げられよ」

石田三成に促されて、為信が面を上げた。

「確かに、女鬼の倅じゃ」

秀吉が、にやつと笑った。

六尺近くの大男の顔は黒い髭で覆われ、太い首と厳つい肩は、鬼のように逞しく見えた。

「拜謁の荣誉を賜り、恐悦至極に存じます。また、陸奥の果てから取り急ぎ馳せ参じましたゆえ、誠に見苦しい身なり、その御無礼の仕儀、幾重にもお詫び申し上げます」

為信はひどく緊張し、震え声ではあったが、淀みなく答えた。

（陸奥の者どもは、粗野で話すのも異国の言葉のようで聞き取れないと聞いていたが、世間の噂とは大違いじゃ）

「加えて、僅か十八人による参陣をお許しいただき、誠に忝く存じ申し上げます。我等、関白殿下のため、津軽を立ちましたその日から命を捨てて覚悟にございます」

「右京亮、その覚悟、誠に殊勝なるぞ」

秀吉は、そう言いながら三成の顔を見た。

「津軽右京亮殿から、平賀、鼻和、田舎の津軽三郡、合浦一円の所領安堵の願いが出されております」

三成がそう言うと、為信が平伏した。

「相分かった。津軽三郡合浦一円、安堵いたす」

ます。南部勢に気付かれずに小田原参陣を果たすには、陸路の移動は極めて危険、海路を取るしかありません。しかし、海路では大人数の移動は不可能。そのため、共には十六歳になったばかりの嫡男平太郎のほか、軍師沼田面松齋など、一騎当千の勇士を引き連れてございます。冬の荒波を乗り越えての参陣、一千人の兵に匹敵する覚悟と存じますが、如何でございましょうか」

利家は、黙ったままだった。三成は、少し間を置いて続けた。

「津軽勢、九戸勢ともに難敵、その両者を相手にしては、南部殿に勝ち目がありません。津軽為信殿が参陣したことにより、難敵の一つが消滅しました。政実一人なら、南部を留守にする手立てはありましよう」

「南部信直、殺すには惜しい。だが、参陣せぬ場合は、命はない」

秀吉がきっぱりと言った。

「津軽右京亮、遠路大儀であった」

秀吉の少し甲高い声が響いた。津軽為信、嫡男平太郎、軍師沼田面松齋の三人が床に顔を埋めるように平伏していた。

「直答を許す。面を上げよ」

秀吉の少し甲高い声が響くと、平伏した逞しい為信の肩が大きく震えた。

「右京亮、そこに控えおるは？」

「軍師の沼田面松齋にございます」

「面松齋とやら、面を上げよ」

面松齋が徐に面を上げた。

「出自は何処か？」

秀吉が、少し意地悪い言い方をした。

「生まれついでての天涯孤独の身なれば、出自は分かりかねますが、今は津軽を終の棲家と心得ております」

面松齋が少しの動揺も見せないで答えた。

（この関白の前で動揺せぬとは、なかなか肝っ玉が据わつておる）

「生まれついでての、渡り、と申すか。それは面白い。育ての親は山伏か、雲水か、それとも草の者、まさか風魔ではなからうな」

風魔は、北条家に仕えた忍者集団である。

「幼きころより家々の軒を借り、生き長らえて参りました身なれば、浮世が育ての親と存じております」

面松齋は静かに答えた。

「浮世が育ての親か。浮世なら名を問うても答えられぬう」

（こやつも鬼の倅——）

秀吉が目を細めて面松斎を見た。

「ところで、面松斎、軍師として尋ねる。僕は、二十万の大軍をもって、小田原城を一気に捻り潰そうと思うが、如何か？」

「はっ！ 某、名もなき田舎侍なれば、関白殿下の御裁可に意見を申し上げるなど、あまりにも恐れ多きこと——」  
平伏した面松斎の顔が引きつった。

（こやつ、身の程もよく心得ておるわ。やはり、ただの渡りではないな）

秀吉の顔がほころんだ。秀吉にとっては、退屈な軍議の合間の余興に過ぎないが、面松斎にとっては、命を掛けた拜謁である。余興であっても、たった一言の失言で首が飛ぶ。面松斎一人の首で済むなら構わぬが、津軽一族ごとくとく撫で斬りにされる恐れがある。それが、絶対的権力者の関白と地の果ての領主の冷酷な立場の違いなのである。

「面松斎、仮に津軽右京亮が僕の立場にいたとしたら、どう進言する？」

「はっ！」と平伏した面松斎の顔が青ざめた。

「沼田殿、関白殿下の御下問なれば、存念なきところをお心えなされ」

三成が面松斎に助言した。

「沼田殿、何を恐れております。命を掛けて進言申し上げます、それも軍師の役目であろう。関白殿下のため、命を捨

「面松斎」

三成が、慌てて面松斎を咎めようとする、秀吉が微かに手を挙げてそれを制した。

「減相もございません。関白殿下の御威光を守るのも兵の役目と存じます」

面松斎が、少しの動揺も見せないで応えた。

（三成まで驚愕しているのに、此奴、平然としておる。命を掛けての進言、どうやら嘘ではなさそうだ）

「それも理屈よ。ところで、津軽の兵は、謀反の火を点ける兵か、それとも関白の威光を守る兵か」

秀吉が、押し殺すような声で言った。居並ぶ武将の表情が固まった。この声で、幾多の者が命を失っている。だが、三成は冷静に面松斎を見つめていた

「津軽の兵は、津軽の安寧を守るのが役目にございます。

津軽を安寧に保つことが、天下の安寧を守ること、すなわち関白殿下の御威光を守ることになるものと存じます」

「ならば、何故、津軽を離れ、小田原に参陣したのか」

「未だ関白殿下の御威光に逆らう輩がおりますれば、まずは、その平定が最も肝要で、急を要するものと存じます」

「南部は参陣しておらぬ。関白の威光に逆らう輩よ。如何に成敗したらよいか、心えよ」

秀吉の押し殺した声が少し甲高くなってきた。

「南部信直殿は、必ず参陣いたすものと存じます」

てる覚悟で参陣したのではなかったのか」

三成が、低い声ではあったが、厳しく告げた。

「これは、なんたる失態」

面松斎が三成に深々と頭を下げ、秀吉に向かって居を正した。

「畏れながら、申し上げます。この度の小田原征伐、北條に万に一つの勝ち目のないことは明らかにございます。なれど、小田原城は誠に堅固な城、力攻めでは、相当の兵を失うことを覚悟しなければならぬものと存じます」

「小田原征伐は、天下統一の最後の戦となる。以後、この

国から戦は消える。戦がなければ、さほどの兵は要しまい」

「恐れながら、領地の安寧を守るには、領地を獲得するほどの兵が必要かと——」

「兵は、戦の道具。戦がなければ、兵は不要であろう」

「領地の安寧を守るのも兵の役目と存じております。武力が弱まれば、そこを衝いて謀反を起こす不屈きな輩が出てこないとも限りません。一旦、謀反の火が点くと、どのように燃え広がるか、予測できかねます。そうなりますと、途方もない兵力が必要となります。領地の安寧を守る兵は、謀反を鎮める兵と同様、欠かせないものと存じております」

「ほう——。其の方、この関白の威光では、天下を治められぬと申すか」

秀吉が冷たく言い放つと、場の空気が凍てついた。

「南部は、津軽の宿敵であろう。この際、津軽の手で攻め滅ぼしたらどうだ」

秀吉がそう言って、面白そうに面松斎を覗き込んだ。

「南部と津軽が争っては、陸奥は大いに乱れます。それこそ関白殿下の御威光に反する仕儀と相成ります」

「津軽は南部と争うことはない」と面松斎が申したが、右京亮、しかと相違ないか」

秀吉が、津軽為信に質した。

「津軽は、関白殿下から安堵を賜った領地なれば、無用の争いは厳に慎み、南部とともに、命を賭して、陸奥の安寧を守る所存にございます」

津軽為信が、力強く断言した。

「相、分かった」

秀吉が満足そうに頷いた。

「ところで、面松斎、京から黄金の茶室を運んで参った。小田原城を眺めながらの茶会、楽しみよ」

秀吉が愉快そうに言った。

「関白殿下は、端から力攻めなど考えてはいなかったか——」

面松斎の顔面が硬直した。秀吉は、それを見てにやりと笑った。

「右京亮、良き軍師を拾ったものよ。僕に献上しろと言いたい、まあ、陸奥も何かと騒々しい。それを鎮めるのが

今は大事。そのためには、良き軍師を欠くことはできない」

「は、はっ」といって、為信が平伏した。

「その童は？」

秀吉が、さり気なく為信の横に伏している若者を見た。

「嫡男、平太郎にございます」

「平太郎、面を上げよ」

（ほう——）

「右京亮、其方の嫡男に偽りはないか？」

秀吉が怪訝な顔をして言った。

「は……？」

為信は、秀吉が何を言っているか、理解できない様子であつた。面松斎が困惑した表情で三成を見た。

「右京亮殿の嫡男に間違いございません」

三成が為信に代わって言った。

「そうか」と言つて、秀吉が小首を傾げた。

（これも、女鬼の采配か）

三成は、思わず笑つてしまった。

為信と面松斎は、長旅で衣服は汚れ、髪は乱れ、髭は伸び放題となっているが、平太郎は、京であしらえた衣服を纏い、髪も丁寧に揃えている。もともと色白で端正な顔の平太郎が、殊更際立つて、公家の御曹司といつても疑いをもたれないほど凛としている。

「平太郎、どのような道筋を辿つて沼津まで参つたか、答

が終えても津軽へは戻らぬと決めてございます」

「はて？ 津軽に戻らず、何処へ行くつもりか？」

「京で伺候いたしたく——」

「待て、今、何と申した？ 京で近習になりたいと申すか？ 近習になるといふことは、人質になるといふことを意味する。」

「右京亮、平太郎の申すこと、其方、承知のことか」

「は、はっ。何卒、お聞き届けのほどを」

「相分かつた。平太郎、氣に入つたぞ」

秀吉が満足そうに頷いた。

「ところで、年齢はいくつか？」

「十六にございます」

「それなら、早速、元服を執り行なわなければなるまい。

烏帽子親は、三成、其方じゃ。そうだ、平太郎、これより

三成に仕えよ。目出度い、実に目出度い」

秀吉は、大声で笑つた。

一日置いて、二十九日には早くも小田原に向け進撃が始まつた。枝城の山中城は秀次、徳川勢に、葦山城は織田信雄に任せ、秀吉は箱根湯本を経て小田原を目指した。小田原に着くと本陣を早雲寺に置き、本格的な小田原攻めに取

り掛かつた。

えてみよ」

「岩木川を舟で深浦という港町まで下り、そこから北前舟で敦賀に向かい、琵琶湖畔の大津から京に出て、京から東海道を下つて参りました」

「冬のは荒れ狂つておる。何故、危険な船旅を選んだのか」

「津軽は深い雪で覆われております。雪を掻き分けての旅は難儀で、多くの日時を要します。一刻も早く参陣いたすには、海路を選ぶ外、ないものと存じます」

「なるほどのう」

秀吉は、満足そうに頷いた。

「長旅、辛くはなかつたか？」

「逸速く参陣しなければと、そのことばかり考えておりましたゆえ、辛さを感じているゆとりはございませんでした」

（さすが、女鬼の孫、うまいこと言うのう）

「戦は、長引くかもしれん。津軽が恋しくなつたら、何時でも母の許に戻つてよいぞ」

「この度の出陣、津軽へは戻らぬ覚悟で罷り越してございます」

平太郎が強い口調でいった。

「死を厭わぬ覚悟、誠に殊勝である。だが、童の力を借りなくとも小田原城は落ちる」

「戦で命を捨てるは、もとよりの覚悟にございますが、戦

秀吉が三成に質した。

「五万五千ほどかと」

「聞きしに勝る堅固な城よ」

「仰せのとおりでございます。力攻めには、相当の犠牲を覚悟しなければなりません」

「まあ、焦る必要はなからう。じっくりと腰を据えて掛かるとするか」

「では、手筈どおり、館を造ることにいたします」

「館を造るのなら、小田原城の者だけでなく、奥州の者どもを震え上がらせるものにしたいのう」

秀吉は、暫く、思案を巡らしていた。

「一夜城がよいか——。目の前に壮大な城が突如現れたら、小田原城に籠もる五万五千の兵どもは勿論、奥州の者どもも肝を冷やすだろう。これは、面白い。三成、早速、壮大な一夜城を造る算段に取り掛かれ」

一夜城の場所として、小田原城を見下ろす石垣山（旧名笠懸山）が選ばれた。小田原城内に悟られないよう、建築現場を樹木で巧みに隠しながら、突貫工事が行われた。

「三成、一夜城の進み具合はどうだ」

「順調に進んでございますれば、六月末までには、完成するかと存じます」

「六月末——。南部は、間に合うかのう」

秀吉が、ほそつと言つた。

「既に、千人の兵を引き連れて出羽仙北を経由し、小田原に向かっている由にございます」

「小田原城が落ちる前に顔を見たいものよ」

「街道の雪も溶けておりますれば、心配は御無用かと存じます」

「そうか」と言つて、秀吉が少し浮かぬ顔をした。

「又左がのう——」

「津軽のことにございますか」

「南部の言い分を聞かないで津軽為信に領地を安堵したことが、納得できないらしい」

「それは、決着済みでございます」

「だが、南部信直、千人の兵を引き連れていると申しただけではないか。津軽為信は、たったの十八人であるぞ」

「津軽為信殿は——」

「三成、何を慌てている。儂は、満足しているのよ。陸奥は、野人の住む地かと思つておつたが、京より面白い者がおるわ。僅かの手勢で逸速く駆けつけた目ざとい津軽為信、千人もの兵を引き連れて参陣する愚直な南部信直、実に愉快な取り合わせではないか」

秀吉が満足そうに笑つた。

「だが、南部の始末、どうしようかのう」

秀吉は、独り言のように呟いた。

「そのことにございますが」

の大軍を率いで参陣したこと、関白殿下はこの上もなく満足しています」

「ならば、お目通りが叶わぬは、何故にございましょうか」

信直の表情は、強張つたままだった。

「目通りが延びるのは、南部殿に関わることはありません」

三成が表情を緩めた。

「小田原城は、ここ数日で落ちます。関白殿下は、北条の仕置きの算段で極めて多忙、そのために目通りが延びるだけのこと」

南部信直の強張つた表情が解けた。

「既に聞き及んでおりますようが、津軽右京亮殿が、去る三月二十七日に参陣し、津軽三郡合浦一円の安堵を受けております」

「そのことなれば——」

三成が信直の抗弁を制した。

「津軽三郡合浦一円は、関白殿下が為信殿に安堵された領地。これに異を唱えることは、関白殿下に逆らうことと相なります」

三成が、意識的に表情を和らげて続けた。

「南部殿の言い分、分らぬ訳ではありませんが、仮に、為信殿が謀反人として津軽の地に留まっていますしたら、この度の参陣、叶いましたでしょうか。南部領内には、九戸政

「何か良い策はあるか」

「南部領の南には、稗貫、和賀など、小田原に参陣しない者どもがおります。其の者どもの領地を没収し、南部殿に治めさせては如何でございましょうか。領地を没収された豪族共の抵抗は暫く続くでありますようが、南部殿にはそれを治める力量があると存じます」

「南部領が南に広がると、伊達の押さえにもなるか——。伊達の小童、油断がならぬ。未だ天下取りを諦めていないと云う。北から南部の監視があれば、反乱の火を点けるのも容易にはできまい。三成、なかなかの策である」

秀吉は、頷きながら言つた。

南部信直が小田原に到着したのは、六月も終わろうとしている頃であった。

「南部殿、遠路、大儀でござつた」

信直を真っ先に出迎えたのは、三成である。

「直々のお出迎え、誠に忝く存じます」

信直が深々と頭を下げた。

「関白殿下への目通りは、今暫くお待ちいただくことになります」

南部信直の表情が強張つた。

「遅参したこと、関白殿下には、御不興にございますか」

「そのことなれば、心配には及びません。陸奥から千人も

実という勇猛な豪族がおると聞いております。津軽、九戸との争いに手間取つて参陣できなかったという言い訳は通りません。そうなりますと、閉伊、岩手から外ヶ浜、津軽に至るまで、陸奥はことごとく没収される運命にあつたものと存じます。如何か」

南部信直の顔が苦渋で歪んだ。

「津軽為信殿は、既に領地を安堵されておりますゆえ、南部殿と争いを起こすことはあり得ません。南部殿が小田原参陣に間に合いましたのは、津軽勢との対峙が消えたため。そうであるなら、南部家は津軽為信殿に救われた、そう思うことはできませんか」

三成は、少し間を取つた。

「南部殿、まずは、所領の安堵、それが肝要ですぞ。よろしいか、陸奥の行く末は、南部殿と津軽殿に託されております。陸奥を安寧の地とするも、戦火の地獄とするも、南部殿と津軽殿の考え方次第。それに、関白殿下は、失つた領地に見合う手当もお考えで、そう遠くない日に吉報がござらう」

七月五日、ついに北条が関白豊臣秀吉に降伏を申し入れた。三か月に及ぶ兵糧攻めで、難攻不落の小田原城はあっさりと落城した。

翌六日、南部信直の目通りが許された。



「南部大膳大夫、この度の参陣、大儀であった」平伏した南部信直は、極度に緊張していた。参陣といっても、数日前に到着したばかりで、何一つ働いていない。遅参を理由に首を刎ねられても仕方がない立場にある。三成からは、心配はないと言われているが、秀吉の機嫌次第で命を失うこともあり得る。

「持参した百頭の南部駒、いずれも見事な名馬。それに五十羽の鷹も見事よ。陸奥の馬と鷹は、何よりの土産。この関白、大いに満足しておる」

秀吉は、すこぶる上機嫌であったが、信直の緊張は続いたままだった。

「小田原城は、片が付いた。この先、さほどの戦はあるまい。陸奥には、未だこの関白の命に従わず、騒ぎを起こす輩がおると聞き及んでおる。南部の領地は安堵するゆえ、早々に国許に立ち戻り、陸奥の騒ぎを鎮めるがよからう」

信直の命が助かっただけではない。津軽の地は失ったが、その外の領地は安堵された。それに、九戸政実の存在が大さな不安材料であったが、早々に帰国も許された。信直は、全身が溶けて地の底に吸い込まれていくかのように力が抜けた。

「又左、いや、前田利家から南部大膳大夫の殊勝なる心根篤と聞き及んでおる。陸奥は広い。天下統一のためには、陸奥の騒乱を鎮めることが不可欠。この上は、津軽右京亮

とともに陸奥の平定に、その力を存分に發揮するがよい」

「は、はっ！」と言って、信直は平伏した。

「大膳大夫、これを遣わそう」

秀吉は、そう言うのと陣羽織を脱ぎ、名刀来国次とともに信直に与えた。信直は、感極まって関白の面前であることも憚らず、大粒の涙を流した。それを見て、秀吉は、含み笑いをした。

南部信直は、領地没収という恐怖と津軽を略奪されたという憤怒の狭間で、心が激しく揺れていたが、関白から直々に陣羽織と名刀を賜ったことにより、その遣り切れない狭間が埋まった。陣羽織の着用を許されての早々の帰国は、小田原に参陣した諸侯の羨望の的ともなった。信直は、大いに面目を施し、意気揚々として北を目指した。

信直の帰国を追うかのように、秀吉から七月十七日付の朱印状が届いた。朱印状によると、南部内七郡が本領として安堵されている。旧領の糠部、鹿角、閉伊、岩手に加え、志和、稗貫、和賀の三郡が追加されていた。失った津軽の代わりの領地である。



## 久保協一

くぼ きょういち

- 1947 岩手県生まれ  
72 立命館大学経営学部卒  
76 法政大学法学部卒  
76 岩手県職員  
2007 岩手県立大学職員  
09 公益法人職員

## 受賞の言葉

久保協一

文芸思潮二六号(二〇〇九年新年号)で三紀村艸氏のお便りを拝読いたしました。病気が悪化したため作品の完成を断念したい旨と文芸思潮との出会いからの五年間に対する感謝の言葉が綴られていました。日付は平成二〇年七月五日でした。その三日後に逝去されたとの奥様の追伸がありました。

受賞の通知をいただき、改めてお便りを読み、「文芸思潮」の重みを痛感しました。その重みに応える作品であるかどうか自問すると、どこかに、退職後の趣味、として書いたとの思いがあり、忸怩たる感もありますが、次の一歩を踏み出す契機を授かったものと受け止め、深く感謝いたしております。

ジャンルに拘る気持はありませんが、遙か昔、教科書で習った中央の歴史だけでなく、地域には地域の歴史があり、その地域から歴史に入ってみると、思いがけない出会いが時折ありますので、今は受賞を励みにじっくりと地域から歴史を見ていきたいと思っております。

## 骨肉の町

## 冴場 渉

クリスマス夜の夜、実家の母親が急死した。冷え切った体をいきなり浴槽に沈め、体温の急変に八十二歳の弱った心臓が耐えきれなかったらしい。同居していた弟は二階の自室において異変に三時間も気づかなかった……しかし、奇妙なことに私がその話を聞いたのは弟本人からではなかった。数十年離れて暮らしているとはいえ、たった二人の兄弟だ。手順からすれば訃報はまずこちらに来るべきだろう。ところが、弟からは何の連絡もなかった。まもなく日付が変わろうという時間になって実家の近くに住む叔母から電話が入り、それようやく母親の死を知ったのだ。弟は知らせるべき親戚にはすべて知らせておきながら、なぜか私

にだけは連絡してこなかったらしい。

おおその事情を話し終えてから、叔母は弟の様子がおかしいと付け加えた。駆けつけた親戚の者たちに、「兄貴には一切口を出させない」と激しい口調で告げていたという。直接連絡してこなかったのは、その気持ちを私に伝えるための遠回しな意思表示だったのか……弟の行動は全く理解できなかったが、ひどく不吉な感じがした。

その後何度も電話を入れたが、家にいるはずの弟は受話器をとろうとしなかった。連絡がつかないまま翌日の早朝、妻と三人の子供たち、それに二歳になったばかりの孫娘を人にも立ち入った口汚い非難の言葉を執拗に繰り返した。その様子は明らかに常軌を逸していた。

第一人が忙しく立ち回り、親戚一同が寺の一室で手持ち無沙汰に黙りこむという奇妙な状態がつづいた。長女の産んだ孫娘の相手をしながら、私は釈然としない思いを誰に話すこともなく抱え込んでいた。弟が親戚の者に伝えた話を又聞きで知っているだけで、母親が急死した経緯について本人から直接説明を受ける場面は一度もなかったからだ。なぜか弟は警察の診断書すら見せなかった。問い質したいことは幾つもあったが、弟の言動が余りにも異常だったので自重した。親戚に言われるまでもなく母親の葬儀を兄弟喧嘩でぶち壊したくはなかった。

危ない場面は何度もあった。どうやら弟はトラブルを起こして親戚の前で私に恥をかかせたい様子だった。そのことに気づき、挑発には一切乗らないようにした。そんなこちらの態度が弟を余計に苛立たせているように見えたが、あくまで知らぬ顔で通した。危うい雰囲気のまま葬儀は何とか無事に終わった。

式のあと弟は全員で会食することを提案したが、誰もその話には乗らなかった。親戚たちはいずれも何らかの理由をつけて逃げるように帰って行った。私も同じ気持ちだった。綱渡りのような葬儀を終えてすっかり疲れ切っていたから、早々に支度を調べ家族を連れて式場を出た。

連れて西へ向かう列車に乗った。正午を少し過ぎた時間に親戚の者たちが顔をそろえる実家に着いた。弟は警察に呼び出されていて不在だった。母親はいわゆる変死扱いで警察医の検死を受けていたから、そのことで死亡前後の事情を聴取されていたのだ。母親のすぐ下の弟である一番年高の叔父から「葬儀だけは無事に済ませたい。とにかく何を言われても黙って欲しい」と言われたときに、前夜叔母が電話で話した言葉の深刻さをあらためて悟った。

数時間後、死亡診断書を受け取った弟が戻ってきた。頬が紅潮し疲れ切った面持ちだった。私に対しては一言も口を聞かなかった。顔をそむけ殊更こちらを見ないようにしている様子だった。皆で葬儀の段取りを相談したが、弟は誰の意見にも耳を貸さず一人ですべてを仕切るとあらためて宣言した。何かを言うべき立場の私はあえて沈黙を守った。口を出せば必ず大喧嘩になりそうな不穏な空気を感じられたからだ。

その日のうちに葬儀屋が入った。母親の遺体を、弟が斎場を選んだ町内の寺に移した。翌日が通夜、翌々日が告別式と決まった。寺でも弟はやはり誰にも手出しをさせず、僧侶や葬儀屋との細々した打ち合わせをすべて一人で取り仕切った。親切心から手伝いを申し出た叔母や従弟には激しい口調で拒絶の言葉をぶつけた。一旦そうなると自分でも抑制が利かなくなるらしく、相手の家庭や家族の一人一

帰り際、寺の外でいきなり弟が殴りかかった。土塀に追いつめられ何とか相手の拳をかわしたところでそばにいた従弟が割って入り、とりあえず最悪の事態は避けられた。弟は従弟に遮られながら、興奮した面持ちで意味不明の罵声を繰り返して吐き続けた。そのときから弟の存在を本当に恐ろしいと思うようになった。

葬儀の直後、弟から電話があった。用件は母親が残した遺産の分割についてだった。兄貴には一銭もやらないと弟は強い口調で言い切った。私は被相続権を放棄するつもりはないと反論した。ただし、分割の方法についてはそれぞれから具体的に提案しろと付け加えて電話を切った。

事業に失敗して苦しいやりくりを続けている時期だった。母親が残した金をあてにする気持ちは強かったが、遺産分割のことで争いたくはなかった。親が残した金のことで兄弟が争い合うのは不様だと思ったからだ。また生活無能力者で五十歳まで親に寄生して暮らした弟には、残りの人生を生きていくための金が必要だった。そのことは母親の死を知ったときから考えていたから、分割が弟に有利な形になることには異存はなかった。頭が冷えれば妥当な提案をしてくるだろうと考えてそのまま放っておいた。

返事が来たのは三月後だった。話し合いをしたいからこちらへ来いというのだ。書類を送ってくれば押印して送

軍隊には「地方人」という言葉があったらしい。軍隊の外にいる一般社会の人々を軽く見る考え方だ。青春期のすべてを軍隊のなかで生きた父親には、そうした物のとらえ方が戦後になっても根強く内在していたのだろう。

どんな場合でも他人を見下した物の言い方をした。食事の席で町内の隣人を手当たり次第に罵倒することが、彼にとっては人生の無上の喜びだった。理由もなくおのれを他人より高い場所に置くような父の態度が、明らかに弟のなかにまで浸透していた。そうした父親の考え方とおのれの能力のギャップが、弟を奇妙に逆説的な腕白坊主に仕立てていたに違いない。

父親は家庭のなかでは絶対的な権力者としてふるまった。標的はいつも私だった。食事時のおしゃべりのようなほんの些細なことではしばしば怒られ、それこそ「帝国陸軍」の流儀で殴られた。十歳くらいまでの私は毎日をひたすら怯えて暮らしていた。

父親はパイプライターなどの喫煙具の卸売りを生業にしていた。私が高校生になった頃にはそれなりの規模の商売をしていたが、当初はカツギ屋か行商人といった程度の細々とした商いをしていたのだと思う。おそらく仕事か思うとおりに軌道に乗らず追いつめられた気持ちでいたのだろう。そんなとき苛立ちを身近にいる子供にぶつけるようなふるまいは、自分が父親になった今では多少理解できな

り返すと答えた。それでも弟は、話したいことがあるからすぐ会いたいと強硬に言い張った。しばらく不愉快な言葉のやりとりをして、結局は相手の勢いに負けて出向くことになった。本当のところは会いたくなかった。会えばろくなことにはなるまいという予感が最初からあったからだ。

うんざりした気持ちを抱えているうちに約束の日が来た。朝早い列車に乗り東京駅から新幹線に乗り継いだ。どうにも気の重い旅だったが、避けて通ることはできない手続きの一つだった。なぜ自分がこんな不愉快な事態に陥っているのか……そのことがどうしても納得できなかった。車中、弟や父母のことばかりを考えていた。

二歳年下の弟は確かに幼児の頃から少し変わった子供だった。どんなときでも必ず棒きれを持って町中を歩き回っていた。そして、自分より弱そうな子供がいると容赦なくひっぱたいて泣かせ一人で悦に入っていた。本当は気が小さくて同年代の子供達と仲良くする術を知らず、腕白坊主のスタンスをとることでちっぽけな自我を守っていたのだ。おそらく父親の育て方に問題があったのだと思う。父親は十年以上の歳月を中国の戦場で暮らした半ば職業軍人のような男だった。戦争が終わった後も彼の外部社会との関わり方は「帝国陸軍」の価値観をベースにしたものだった。

くもない。しかし、小さな子供だった私にとって父親の怒りを一人で受けとめることはこの上もない恐怖だった。

父親のやり方は今の基準で見ればほとんど「虐待」に近かったと思うが、そんなとき母親は一切口を差し挟まなかった。親のいずれかが子供を強く叱れば、もう一方はなだめ役に回るのが普通の家庭だろう。わが家にはそういう場面は一度もなかった。母親は私の育て方について父親と同じ考え方をしていたのだろうか。それとも父親を恐れて口を出せないでいたのか。真実は今でもよく分からない。少なくとも彼女は傷ついた子供を無条件に受け容れる母性を持ち合わせていなかった。

その時代の女性としては高い教育を受けていた母親は、私を読みたいと願った書物を惜しみなく買いつけてくれる人だった。しかし、勉強になるとひどく厳しくて、学校から帰ると宿題の他に程度の高い学習ドリルの数ページを課題として与えられた。そして、難しい問題が解けなくて立ち往生していると、決まり文句のように「お前は普通じゃないんだから」と叱責した。私は股関節に生まれながらの障害を持っていた。母親の言葉がそのことを指しているのは十分分かる年頃だったから、子供の心はますます萎縮し惨めな気分になった。

父親は無神経な男で、私を邪険に扱う反動のように弟を

猫可愛がりした。うわべは腕白坊主で元気の良い弟の方が見所があると思っていたのだろう。不当な扱いを受けているという自覚は明瞭にあったが、それが理由で弟を憎むようなことはなかった。弟は家のなかではむしろさびしがり屋でいつも遊んで欲しくて私の後をついて回った。虫けらと工作が好きで想像力の世界に一人で没頭することを楽しむ子供だった私は、時に弟の存在を煩わしく思うこともあった。それでも大抵の場合は相手をして遊んでやった。近所の子供をひっぱたいて歩く行動はどうしても理解できなかった。同じ屋根の下に住む少し奇妙な生き物……私は弟をそんな風に見ていた。

おそらく私の身体的な障害が父母の心に深い影を落としていたのだろう。障害の程度は軽く日常生活は普通にこなせたが、同じ年頃の子供達と一緒に戸外を駆け回る身体能力はなかった。二人はそのことに強い失望の念を抱いていたに違いない。戦争をくぐり抜けてようやくもうけた最初の子供が障害を持って生まれてきた。父母はそれが無念でならなかったのだ。この子は出来損いだ……そういう思いが彼らの心のどこかにあったはずだ。もちろん障害を持った子供だからこそ、何とか一人前に育てたいという気持ちもあったのだろう。母親が勉強に厳しかったのは、いわば肉体的欠陥を持った子供に対する親心の発露だった。しかし、子供の私にそうした親の気持ち的理解できるは

東京へ旅立った。

中学生のときに考えたとおり、学校を卒業して東京で職を得た。結婚して家庭を持つてからも、郷里の家族には全く関心を持たなかった。というより、むしろ家族の存在を強いて忘れようとしていたのだ。表面上は父親を憎む気持ちは消え失せていたが、母親の度々の懇願にもかかわらず実家に帰ることはほとんどなかった。故郷は私にとって忌まわしい記憶をいやでも思い起こさせる場所だったからだ。

父親の入院や弟の結婚など家族の大事も、何かと理由を見つけては行かないで済ませた。弟が父親の探してきた女性と結婚して子供が一人生まれたこと、その女性とたった三年で離婚して家に戻っていること、そんな様々な家庭の事情を知ったのはすべて母親との電話のやりとりからだ。父親が死んでから母親はこちらに頻繁に電話して来るようになった。すっかり弱気になった母親との通話だけで知る疎遠で興味のない世界……生まれ育った家庭は私にとってその程度の存在に過ぎなかった。

家族のことばかりをあれこれ考えているうちに列車は故郷の駅に到着した。新幹線を降りてさらに乗り換え、私鉄線の駅に着いたときにはすっかり午後になっていた。そこが私の生まれ育った町だった……

ずはなかった。小さな子供は親に怒られると自分が悪いからだと思ひ込む。そして、どこが悪いのか分からないと自分という存在を見失ってこの世に居場所をなくしてしまう。おそらくそんな心理状態だったのだろう。生まれ育った家は自分のいる場所ではないとごく幼い頃から漠然と思っていた。中学生になった頃には父親に対する恐怖心はなくなったが、早く家を出たいという気持ちだけはずっと消えずに残った。

中学一年生の春、どうすれば家を出ることができるのかを真剣に考えた。たどり着いた結論は東京の大学に進学することだった。東京の学校に通いそのまま向こうで職に就けば家との縁は切れる。中学生の知恵でそんな風に考えたのだ。その年の夏から本気で勉強をするようになった。教師の許しを得て夏休みの教室を借り、朝から夕刻まで苦学した英語と数学の復習を繰り返した。効果はすぐに出て一年生の終わり頃には、それまで中の下辺りで低迷していた成績は学内でもトップクラスに躍進した。

成績が向上すると、冷淡だった父母がにわかに私をちやほやするようになった。要するに彼らは自慢できる息子が欲しかったのだ。私には父母の本音がよく分かったから、いよいよ家を出たいという気持ちが強くなった。十八歳のとき志望の大学に合格した私は、二度と帰らないつもりで

改札口の正面に合併で名称が変わった銀行の建物がそびえ、その右手が「地藏通り商店街」とネオン管で縁取られたアーケード街の入り口だった。記憶では銀行は昭和二十年代から同じ場所にあった。以前は裏に映画館が二軒あったが、すでに取り壊されて跡地に六階建てのマンションが建っていた。商店街の入り口で数十年営業していたパチンコ屋も廃業して商業ビルになり、日本中どこでも同じ看板のハンバーガーショップが営業していた。しかし、大きく変化したのは駅前の一帯だけで、雑然とした場末の雰囲気は町の随所に残されていた。十八歳のとき、その町のがさつな住人と町が吐き出す特有の臭気が何よりも嫌いだ。アーケードのなかに一歩入ると昔と同じ屋号の店舗が軒を連ねていた。代替わりして店構えはそれぞれ装いを改めていたが、店の並びそのものは子供の頃とまったく変わっていない。前回とは異なるのは子供が頭にあつてよく見なかったが、あらためて見渡してみても懐かしい気持ちはなく、むしろその停滞ぶりに一種の嫌悪感を覚えた。

タイトルで舗装された通りを歩いていくと、玩具店の前でエプロンをつけた中年女が声高に客と話していた。その声には聞き覚えがあった。玩具店の次女で小学校の同級生だった。長男がいたが父親とソリが合わず外に出て家を構え、次女が婿を迎えて店を継いだという話を母親との電話で聞いたことがあった。小学生の頃の小太りの体型はまるで変

わらず、動作が鈍かった私の世話をしきりに焼いた頃の表情がそのまま残っていた。ここでも甘い感情はなかった。小さい頃の記憶は私を傷つけ暗い気分させるだけだった。

やはり同級生の背の高い女の子がいた新聞店の前を右に折れた。商店街の外郭に当たるその通りには、以前は雑貨や食料品を扱う露店が雑然と建ち並んでいた。しかし、今はすっかり様変わりして小綺麗な外観の飲食店が看板の派手さを競い合っていた。ドブ川を埋めて通した舗装道路の際に、子供の頃通った銭湯が残っていた。新築された当時は町でただ一つの四階建てで立派に見えた。そのビルもずっと以前から手を入れた様子はなく、外壁に汚れが目立つみすばらしい建物になっていた。

銭湯の前を左に折れ、左右に間口の狭い家屋が建ち並ぶ住宅街の道に入った。幼児の頃、その道だけが自分の知る全世界だった。当時は随分広々とした世界だと思つたが、五十歳を過ぎた大人の目から見れば路地に毛が生えたような狭い通りに過ぎなかった。かつて私はその世界から抜け出そうともがいた。しかし、今になってみればがっかりするほどありふれた町の情景が開けているばかりだった。

しばらく歩くと右手に瓦屋根の家が見えてきた。柱が腐朽して庇が傾き、はがれた瓦の隙間から雑草の類が夥しく芽吹いていた。通りに建ち並ぶ建物のなかでもひととき荒廃の著しいその家屋が私の生家だった。戦争で両親と家の

窓のなくなった部屋から、やはりほとんどの調度がなくなっていた。子供の頃から同じ場所にあつた整理ダンスやテレビ、さらには裁縫箱や救急箱のような細々とした小物まで一切取り除かれて、ただ部屋の真ん中に電気炬燵だけがぼつんと置かれていた。その寒々とした情景が弟の心の裡を映し出しているように思えた。

無意識のうちに玄関に一番近い席を選んで腰を下ろした。スイッチをオフにした炬燵はその場の雰囲気と同じように冷え冷えとしていた。前を見ると天板に幾つもの書類が病的な几帳面さで並べられており、それが何かの調印式でもといった風情で少し滑稽な感じがした。

「さっさと済ましてしまおう。忙しい時期だから今日中に家に帰らないと……」

思わず口に出した言葉は私の本音だった。不愉快ではあるが避けて通れない行事を一刻も早く終わらせ、いることを強いられている息苦しい空間から抜け出たかった。

弟は無言だった。心なしか鼻先でせせら笑った感じがした。どうやらこちらの気持ちを見透かされている様子だった。

「これを見てくれ」と、抑揚のない声で言つて弟は一枚の紙片を突きつけるように差し出した。

B 五判の小さな用紙に「分割案」と表題が記されていた。親弟特有の角張った書体の文字が紙面一杯に躍っていた。親

両方を失った父親は、預金通帳の残高を大きくすることだけをして人生の目標にした。「現金以外は何も信用できない」それが父親の口癖だった。その考え方のせいか彼は住居を立派にしたいという欲望を持たず、戦前からの古家を安値で買つてろくに修理もしないで住み続けた。そして、家を建て替えるべき立場の私は十八歳で故郷を捨てた。築七十年の老朽家屋はいわば私という人間の永い不在を物語っていた。

立て付けの悪い引き戸を開けて家に入ると、玄関の四畳半に弟が身構えるように立っていた。険しい表情だった。こちらを凝視する目に激しい憎しみの気持ちを感じた。それまでの経緯からある程度覚悟はしていたから驚きはなかった。しかし、心の構えはできていたとはいえ、そうした露骨な悪意を間近で受けとめることはさすがに不愉快だった。さしあたり相手の視線を強いて無視して極力自分の気持ちを表に出さないようにした。

靴を脱いで家にあがつたとき妙な違和感があつた。その理由はすぐに分かった。四畳半の窓際にずっと前から置かれていた足踏み式のミシンがなくなっていた。土産物の人形やこけしが雑然と飾られていたガラスケースも消え失せており、部屋には何一つ調度が見当たらなかった。

六畳の居間も同様だった。奥に寝室を建て増したせいで

が所有していた資産とその評価額が列挙されており、一つ一つに被相続人の名が記されていた。

強いて表情を取り繕つて、頭のなかでは自分の取り分を忙しなく計算していた。どう見てもひどく不公平な分割案だった。不動産や有価証券をすべて弟に譲り、分割の容易な現金預金だけを二分の一ずつ相続しようというのがこちらの腹案だった。その目論見は見事に無視され、資産の大半が相続する内容になっていた。しかし、ここで争うつもりはなかった。そのとき抱えていた高額の負債を一つどうやら処理できる取り分になっていたから、まずは上出来の部類だろうとあえて自分を納得させた。

「お前がこれでいいならおれに異存はない。実印は持ってきた。どこに押せばいいのか言ってくれ」

「どうしてこんな数字をおれが出したか聞かないのか」  
「聞く必要はないだろう。お前がそれで満足しているなら結構だ」

「兄貴はいつもそうやっておれと話すのを避けたがる。だけれど今度だけはそれでは済ませない。こんな数字を出した理由を聞かせるためにこちらに呼んだのだ」

感情を無理に抑え込んだ生硬な口調だった。背筋に冷たいものが走った。弟の表情には明らかに殺意があつた。

「分かった。言いたいことがあるなら言え」  
中学生になってから、兄弟二人きりで話したり遊んだり

する機会は一度もなかった。それから永い歳月が経って久しぶりに向き合っている弟は、私にとつて記憶にはない見知らぬ他人だった。しかも、その他人は明らかにこちらに對して強い敵意を抱いていた。葬儀の直後、山門の下で体当たりされたときの恐怖が甦った。

「兄貴は自分の身勝手から家族を見捨ておれやお袋を犠牲にした」と、弟は激しい口調で切り出した。それまでの態度をかなぐり捨て、感情を剥き出しにした言葉をぶつけてきた。諍い合うことはどうしても避けたい気持ちだったから、私は沈黙を守った。

「兄貴は勝手に決めてさっさと東京の大学に行った。そのことが家の負担になって、おれはどうとう進学できなかった」

意外な言葉だった。金に関する不愉快なやりとりをすることは最初から覚悟していた。しかし、弟の口から出た言葉は私が予想もしていなかったものだった。

言っていることも事実とまるで違っていた。小さい頃から勉強が苦手で、父親が伝手をたどって無試験で入れる高校を探し歩いたような弟だった。大学どころではなかったのだ。私自身は親の世話にはなりたくなかったから、下宿の家賃や生活費はアルバイトで稼いでまかっていた。弟が犠牲になるほど家計に負担を強いたわけではない。

「それきり兄貴は帰ってこなかった。おかげでおれは家の

仕事をやるしかなかった。やりたいことは他にあったのに、兄貴の身勝手のせいで面白くもない仕事をする羽目になってしまった」

父親は他人とまともにつきあえない弟の性格を知っていたから、家業を手伝わせるつもりだった。弟本人も学校には行かず金儲けをすると父母に言っていたらしい。明らかに真実と異なる話だったが、それでも反論はせず沈黙を続けた。

「親父が商売をやめたとき、おれは自分で別の仕事をするつもりをしていた。その頃、兄貴が向こうで家を買ったから、商売をはじめするための資金をそちらに回されてしまった。また家族を見捨てた兄貴に邪魔をされたわけだ」

頭のなかでこね上げた手前勝手な話をしていた。母親からことの顛末を聞いていたから私にはその嘘がすぐに分かった。弟は金銭感覚が全く欠如した人間だった。狡智にたけた取引先におだてられて際限なく商品を提供し、自分はいっぱし商売が上手な人間だと思いこんでいた。そのくせ代金を回収するという一番大事な仕事ができず、売掛金の額が資金繰りを破綻させる規模にまで膨れあがった。成り行きに恐怖した父親が奔走して金を回収し、すっかり疲れ果てて商売をやめたというのが真相だった。新規の仕事をはじめるところの話ではなかったのだ。

「いつも兄貴はおれの邪魔をしてきた」と、弟は悲鳴に似

た声を出した。「ペンションのときもそうだ。信州の土地をおれと兄貴の共有名義にすると親父は言った。おれは断固反対した。結局、土地はお袋との共有になったが、あれも兄貴の差し出口だ。家族を見捨てて逃げ出したくせに、金が絡むとしゃしゃり出て自分の権利を主張する。商売を始めてからお前は資金繰りに困るたびにお袋に金を無心していた。お前はそういう恥知らずの小狡い人間だ」

やはり真実とはほど遠い話だった。父親が商売をやめた後、弟は信州でペンションをやりたいと言い出した。弟を自分の目の前から追い払いたかった父親は、渡りに船でその話に乗る土地を手当てした。結局、ペンション経営は弟の能力では手に余り実現しなかったが、その話は母親から聞いただけでこちらには何の関係もなかった。父親が兄弟二人の共有名義にしたがった理由はよく分からない。いずれにせよペンションについて父母から相談されたことは一度もない。

そのときになってもまだ私には状況がよく呑みこめていなかった。なぜ自分がこれほどまでに激しい敵意の的になっているのか、本当の理由がどうしても理解できなかったからだ。正直なところ私は困惑しきっていた……

弟の恨み言は終わりそうもなく、「見捨てた」という言葉を何度か繰り返して使った。母親は弟の前ではそんな言葉

を使っていたのかも知れない。しかし、「見捨てた」と言われるほど母親や弟に頼りにされていたのかと、むしろ不思議な気分が襲われた。確かに私はこの家族を「見捨てた」のだろうか。「見捨て」しかも「利用した」というのが本当のところだ。私は親の金をあてにすることに何らの痛痒も感じなかった。自分の家族を守るために金が必要で、その金を親が持つていけば援助を仰ぐのは当然だと思っていた。子供の頃つらい仕打ちを受けたことに對する見返り……そんな気持ちも確かにあった。もちろん父母の側には別の言い分があったのだろう。それを聞く機会はとうとうなかったが、少なくともそのことで弟にとやかく言われる筋合いはなかった。自分の都合で弟を犠牲にしたことなど一度もなかったからだ。しかし、弟は「見捨てられた」家族の代弁者として目の前にいた。それは私にとって意外な展開だった。

「何十年も前に家を捨てたお前なんか金を渡してたまるものか」と、弟は嘲笑う表情になって続けた。

「商売に失敗して金が欲しいんだろが、それだけでも貰えただけありがたいと思うんだ。お前は理屈で生きている人間だ。商売には向いてない。おれならこの金を何倍にもしてみせる。そうすれば親が残した金も生きるといふものだ。仏壇も渡さないから。おれが死ぬまで親の供養をする。お前にはその資格がない」

仏壇など欲しくなかった。金に執着するつもりもない。ただ不思議でならなかった。生まれてからずっと親の金に寄生して暮らした男が、すっかり家族の代表者のような態度をとっていた。弟にとってもこの家は決して居心地の良い場所ではなかったはずだ。幼児の頃弟を可愛がった父親は、晩年にはその存在に恐怖し何とか自分から遠ざけようとした。父親の死後は母親との口論が絶えず、気に食わないことがあると家の金を持ち出して何ヶ月も旅に出ている。そんな男にとって家族とはそれほど大事なものだっただろうか。それとも親が残した金を独り占めしたくて私を脅しているだけなのか。そこところがよく分からなかった。理不尽としか思えない弟の非難を、私は沈黙だけを唯一の楯にひたすら受け続けていた。

「さあ、もういいだろう。そろそろ帰る時間だ。とにかくお前の好きにしろ。どこに判を押すのか言ってくれ」

自分の言葉に酔うのか、話すにつれて弟の怒りは募る様子だった。長居は無用だと思っただけから逃げる算段に入った。「どうしてもおれとまともに話をしたくないようだな。判は押して貰う。だけどその前にもう一つある」

そう言いながら弟はまた別の書類を取り出してこちらに突きつけた。やはりB5判のチマチマした用紙に例の角張った文字が連なっていた。表題に「挨拶状」とあった。

弟が突きつけた「挨拶状」をバッグに収めて立ち上がった。「仏壇に手を合わせていかないのか」

「お前が一人で供養するんだろう。おれが手を合わせたら不愉快じゃないのか」

「そういう人間だから、お前に親の供養を任せるわけにはいかないんだ」

捨て科白には取り合わず足早に玄関に向かった。とにかく早く外に出たかった。

靴を履き引き戸を半ば開けたとき、弟が後を追うように出てきた。いよいよ殺されるのかと恐怖に全身が縮み上がった。

「ちょっと待てや……」

投げつけた言葉は刺々しかったが、それまでの生硬な標準語ではなく郷里の言葉になっていた。

「兄貴は昔からおれとまともに話をしようと思ん。兄貴はそんなにおれのことをバカにしてるのか」

明らかに態度が変わっていた。こわばっていた顔の造作が崩れて今にも泣き出しそうに見えた。その豹変ぶりに私は当惑した。そして、恐怖心が少し薄れた。

「バカにはしていない……ただ、お前のが嫌いなんだろくな」

少し考えてから答えた。いつでも外に出られる場所に

「お前が親戚中に悪口を言いふらしたおかげで、誰もおれのことを相手にしてくれなくなった。この文面でお前から全部の親戚に手紙を出せ。これはお前に金を渡す条件だぞ」

どこまでも愚かな男だった。「挨拶状」の内容は今後は弟がこの家を代表する人間だからよろしく頼むというようなものだった。悪口を言った覚えなど一度もない。以前から弟は親戚の家に無遠慮に押しかけて、その家の誰かをやり玉に挙げて口汚く非難するようなことを度々していたらしい。そんなふるまいや葬儀のときの異常な様子を見れば、親戚の者たちに毛嫌いされるのは当然だろう。弟にはおれのしていることがまるで見えていなかった。

「ああ、分かった」

家の代表者が誰になろうとどうでもよかったがし、手紙を出すつもりもなかった。しかし、この場はそう答えるのが穏当だった。

「じゃ、書類に判を押せ。押す場所は分かるようにしてあげる」

口に出す言葉は支離滅裂だが妙なところだけ几帳面な男だった。税務署に提出する様々な書類は、税理士に作成を依頼したらしくきちんと整っていた。ご丁寧なことに捺印が必要な箇所にはいちいち鉛筆書きでしるしがついていた。私は手早く実印を押した。

「これで終わった。おれは帰る」

たせいか、知らぬうちに強気になって本音を口にしていた。長い時間不本意な沈黙を強いられていたから、その鬱憤晴らしという気分もあって言葉が続いた。

「お前は親父とそっくりだ。大して利口でもないくせに、自分の思い込みを考えもなく口に出して周りの人間を不愉快にする。おれはお前のような無神経なやつは大嫌いだ」

「そうか。大嫌いか……」

弟はつぶやくような小声で言っただけで肩を落とした。ひどく情けなさそうな顔をしていた。まだ腹立ちがつづいていたから追い打ちを掛けた。

「ああ、嫌いだ。さつきからお前がしていた話は何もかも嘘だろう。都合の悪いところは全部はしょって、都合良くでっち上げた筋書きを自分でも信じ込んで得々と話している。そういうところが親父と同じだ。本当のことはお前自身が一番良く知っているはずだ」

弟を非難するつもりがいつの間にか父親を非難していた。まだ憎しみの心が残っていたのかと意外な気持ちになった。弟と向かい合っていてずっと強い嫌悪感があった。私は弟の態度や口ぶりに父親の影を見ていたらしい。

弟は口をつぐんで一切反論しようとしなかった。すっかり立場が逆になっていた。弟は子供の頃家のなかでは気の弱い甘えん坊で、兄弟二人だけのときは遊んで欲しさに私の言うことに唯々諾々と従った。たまたま遊んでやらない

と、すぐにも泣き出しそうな顔になった。そのときの表情になつていた。

「偉そうなことばかり言っていたが、お前は他人のことを責める資格のある人間じゃないだろう」

怒りは持続していたから弟に対する恐怖心は消えていた。相手を非難する言葉が次々に口から出た。

「お前は親が見ていなければ何一つまともによれないような男だ。そんなことは自分でもよく分かっているはずだ。嘘っぱちを並べて自分のだらしなさを正当化したいんだろが、おれは本当のことを全部知っているんだぞ」

弟はやはり反論しなかった。泣き顔はそのままでした。

「おれが東京に行ったせいで進学できなかったと……でたためを言うな。お前には進学する学力などなかっただろう。確かにおれは学費は出して貰った。おれが大学に行くことに親は反対していなかったからだ。だけど下宿代を払って食っていくための金は自分で稼いだ。毎月死ぬほど働いて卒業したんだ。そのことでお前のような怠け者につべこべ言われる筋合いはない」

家族のことなど気にも掛けていないはずだったのに、弟を否定しようとする気持ちを押さえきれなくなっていた。

「お前は愚かな男だ。離婚した後別れたかみさんの実家に押しかけて、ストーカーまがいの行為を繰り返していた。おかげであれ以来未だに子供にも会わせて貰えない。離婚

弟はこちらを見据えて肩を小刻みに震わせていた。やがてその目から涙がこぼれた。

「兄貴はいつもおれを馬鹿にしてた……」と、弟は涙声で続けた。「子供の頃からずっとだ。二人でまずいことをやっても、兄の智史はいい子と決まっていたから、いつもおれが悪者にされた。皆がそう思うように兄貴が仕向けたんだ。それでおれがどれだけ口惜しい思いをしたか分かるか……自分で考えてやったことにおれを巻き添えにして、都合が悪くなるとおれを見捨てて逃げた。それで自分だけいい子だ。ずっとそんな風におれをバカにしてきた。そのくせ大人になるとさっさと家族を捨てて逃げ出した。おれには一度も挽回するチャンスがなかった」

「それでお袋の葬式だけは一人で立派に仕切ろうと思ったのか。結果はあのごまだ。親戚中あきれてこちらは大恥だ。いいか、チャンスは何度でもあったんだ。何十年も時間はあったんだから。それでもお前は何一つまともによれず、しくじるたびに親に尻拭いして貰った。子供の頃のことを持ち出すなんて情けないことはするな。お前がちゃんとやっつてればそんなのは笑い話になつてははずだ」

決めつけると弟は再び口をつぐんだ。すっかり弱気になった弟を見ているうちに気づいた。母親が死んだときから弟の態度には明らかな狂気が認められた。しかし、それは強い精神的打撃から生じた狂気ではなく、本当は装われた

しても親子は親子だ。あんなことをしなければ子供の顔くらしいはいつでも見られたんだ。叔父さんから話は聞いたぞ。あちらに連絡してお袋の葬式に出てくれるよう頼んで、こつぱどく断られたんだろう。だから葬儀の間気持ちが動揺して親戚の皆に噛みついてばかりいた。お前はいつもそんな具合だ。考えもなく気分のままに行動して取り返しのつかない結果を招く。つまり愚か者だということだ」

弟は相変わらず口をつぐんでいた。さすがに自分のなかの凶暴な怒りを持って余しながらそれでも言葉が続けた。

「親父が死んだときもそうだった。あのときお前はどこかで遊び呆けていて居所も知らせなかった。それでとうとう連絡がつかず葬式に間に合わなかった。親戚の者にお前がいな理由を説明するのにお袋やおれがどれだけ苦労したと思おう。おれが親父の金欲しさに画策したと。ふざけたことを言うな。あのときおれが何か得をしたか。親父が残した金の一部を貰ったがそれはお前も同額のはずだ。おれには資格がないと……おれに資格がないならお前にはもつとない。二十年以上も遊び暮らして家の金を食いつぶしていた男が一人前の口を聞くな。それでもおれはお前になるべく金を残してやろうと思つたから、お前のでたらめな分割案とやらを何も言わずに認めるつもりになつておるんだ。そこまで考えてやっているのにお前は根拠もない恨み言を言う。少しは恥ずかしく思え」

ものだったのかも知れないと……おそらく、弟は何かを隠そうとして無理に虚勢を張っていたのだ。

弟は母親の死を知らせてこなかった。死亡診断書も見せなかった。そういう態度をとつた理由をあらためて考えてみた。弟は何かを恐れていたのだろう。恐れていたとすればそれは私の存在だ。母親の死について兄である私に深く追及されたくないのだ。それをさせないために先に親戚中に話すことで既成事実をつくつた。老人が浴槽で心停止したようなケースでは警察の検死もおざなりだ。そのことも迷惑のなかに入っていたに違いない。すべてが偽装だったのだ……そこまで考えが及んだとき、ずっと抱えていたわだかまりが頭の片隅にあったある想像と結びついた。

「お前、お袋を殺したんだろう」

思わず口に出していた。自制は働かなかった。それほど衝撃が大きかったからだ。

「お袋は年寄りだ。手を下さなくても強い言葉一つで心臓が停まってしまうこともある。そういうことだったのだから」

永い沈黙があった。この場合はむしろ反論して欲しかったが、弟は顔を伏せてひたすら押し黙つたままだった。ひどく動揺している様子に見えた。紅潮していた顔から血の気が失せ、怯えるように激しく肩を震わせていた。

言ってしまったことをさすがに後悔した。頭のなかに目



をそむけたくなくなるほどおぞましい光景が映っていた。母親は浴槽で死んだのではない。激しい口論のさなかに急死した母親を裸にして弟が浴槽に漬けたのだ。

そのとき弟が昔からあった調度類を処分した本当の理由が分かった気がした。弟は母親の記憶がまつわりついた一切のものを、自分の目の前から取り除きたかったのだ。「兄貴がおれたちを見捨てたから何もかも無茶苦茶になった……」

しばらくして弟は涙を拭い、消え入るような声で言った。その言葉がすべての答えになっているような気がした。

「おれは帰る」

やっとそれだけ言っただけで力を込めて引き戸を全部開けた。あれほど願っていた外に出て息苦しさは消えなかった。

来た道を戻りはじめたが知らぬうちに足早になっていた。弟を恐れる気持ちが甦っていたから、少し歩いては後をふり返る行為を何度も繰り返した。人通りの多い商店街の道に入って少し緊張がほぐれた。立ち止まってもう一度後をふり返った。弟の姿は見えなかった。それでようやく安心して普通の足取りになった。

様々な思いが頭のなかで渦巻いていたが考えはまとまらなかった。怒りの感情はもう消えていた。弟に会えばろくなことにはなるまいと思っていたが、こんな結果はさすが

郷や」

「うん、そうだな」

「お墓もこちらにあるんでしょ」

「ああ……」

「それやったらなおさらや。縁が切れるわけないでしょう。今度帰ってきたときはうちにも顔を出して。皆で集まって昔話でもしたいわ」

生まれたときからずっとこの町で生きてきた彼女は屈託がなかった。彼女にとって故郷は空気のような自明の存在なのだろう。他方、強い決意をして生地を捨てた私とは言え、置き去りにしてきたはずの故郷に囚われて身動きできないでいる。その事実を受け容れることがどうしてもできなかった。

「じゃ、帰る時間だから……」

まだ何か言いたげな彼女に一礼して再び駅の方角に足を向けた。

そのときようやく思った。自分は母親の死をどう受け止めたのだろうか……訃報を聞いたときから弟のことばかりを考えていた。私にとって弟とのトラブルは予想外の事態で、そのことにかまけて肝腎の母親の死について自分自身の気持ちを検める機会は一度もなかった。

ごく普通に親の死を悼み悲しもうという気持ちはまるで

に予想していなかった。商店街の情景はもう目に入らず駅への道を急いだ。

「智史ちゃん」

小さい頃の呼び名を耳元で聞いて私は驚愕した。声がした方に顔を向けると玩具店の娘が立っていた。

「智史ちゃんでしょう。さっき見かけたときすぐに分かった。お母さん亡くならはったんやて。大変やったな」

ひどく困惑していた。小学生の頃、学校でもいじめられっ子だった。いつもめそめそ泣いていた私の世話を焼いてくれた女の子達の一人が彼女だった。それは私にとってずっと忘れていた記憶の一つだった。人違いですと言いかけてさすがに言葉を飲み込んだ。ここで逃げ出すのは不様だという思いがあったからだ。

「ああ、その後始末で帰ってきた。久しぶりだけど元気そうだな」

「そもそも、元気だけはあり余ってるわ。それでどうするの、こっちへ戻ってくるの」

「家族も仕事も向こうだから戻れない」

「そら、そやな」

「親が二人とも死んでしまったから、もうこの町とも縁が切れそうだ」

「そんなことないでしょう。ご両親が亡くなっても自分が生まれた町には違いないんやから。ここが智史ちゃんの故

なかつた。その気持ちはないから弟が母親にした行為に憤る感情も生じなかつたのだろう。最初に思ったのは私が家を「見捨てた」ことと、この不幸な結末との因果関係だった。おそらく弟は兄である私に責任があると強弁すること、おのれが背負うべき荷物を軽くしようとしていたのだろう。私が出たおかげで家族のなかのバランスがすべて崩れ、それが最悪の結末を招いたと言いたかつたのだ。弟の強弁はいわば言い逃れに過ぎなかつたが、夥しい非難の言葉は心に鋭く突き刺さっていた。

上京してからずっと故郷や家族について関心を持たなかつた。本当のところは気にしないのではなく、気にしないように努めていたのだ。いつかそうした態度が習いになり、家族への情という気持ちを失くしてしまったのだろう。薄情者という言葉がどうしても頭に浮かんだ。おそらく弟はそのことを繰り返し非難していたのだろうが、さすがに自分が情の薄い人間だと認めたくはなかつた。しかし、そうではないと断言する材料を持ち合わせているわけでもなかつた。

母親は明らかに負い目を感じながら私に接していた。小さい頃の育て方が間違っていたと後悔していたのだろう。電話で話すたびに「あんたはこっちに帰ってこんやろと思つてた」と、愚痴とも非難ともとれる言葉を口に出した。私の方とは言え、そうした母親の気持ちを敏感に察して、





「骨肉の町」は私にとって特別な『思い』のある作品です。その作品がこの度思いがけず銀華文学賞の優秀作という価値ある賞を頂戴できたことは本当にありがたいと感謝に堪えません。

五年前、私は転移性のガンと診断され緊急入院しました。そして、手術待ちの病床のなかで、自分と自分の家族について書いてみたいという強い欲求を持ちました。そうした気持ちから、娘のノートパソコンを病室に持ち込んで書いた文章がこの作品の一部となっています。

当初、担当医師の診断は悲観的でしたが、幸いにも手術は成功しました。二ヶ月後には退院することができましたが、体力の回復も待たず抗ガン剤による治療を始めました。しかし、薬剤の毒性によるダメージは大きく、心身共にどん底の状態が過ぎました。それでも病室で書いた十数枚の文章に拘る気持ちは強く、その文章を核にした小説を書いてみたいと思いました。副作用の一つなのか失語症に似た症状があり、まともな文章が書けない状態のなかで、週にわずか十数行の遅々としたペースで書き進めましたが、

結局、この作品を完成させるのにほぼ四年の歳月を費やしましたが、今振り返ってみると私にとってこの作品を書き上げることが、病気に打ちのめされた自分の心と体を快復させるリハビリテーションの意味を持っていたのだらうと思います。

## 冴場 渉

さえば わたる

- 1948 大阪府守口市生まれ  
70 早稲田大学政経学部卒業  
91 サラリーマン生活を経てコンビニエンスストア自営  
2000 経営不振によりコンビニ店廃業、現在探偵業自営  
03 『コバルトアワー』で千葉日報社「千葉文学賞」受賞  
08 「文芸思潮ウェーブ」に『甲虫の家』を発表  
09 「文芸思潮ウェーブ」に『決別の川』を発表

当初、いわば遺書として書き始め、後には再生のためのリハビリという前向きな意義を持ったこの作品が受賞したことは、私にとって望外の喜びであり、何よりも書きつづけるための励みになりました。心から感謝いたします。ありがとうございます。

## 文芸思潮 読者の皆様へ

## 初夏号お休みと定期購読料値下げのお知らせ

読者の皆様には、日頃文芸思潮を御愛読いただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで、文芸思潮も7周年を迎えることができました。これも皆様のあたたかい御支援の賜物と深く感謝申し上げます。

さて、2011年2月より7月までアジア文化社の入居しております家屋の建替えにより、初夏号を休刊とさせていただきたいと存じます。読者の皆様にはたいへん御迷惑をおかけいたしますが、何とぞ御了承、御容赦のほどお願い申し上げます。5月末発行の号をお休みいただき、以後7月発行41号が夏号本号、9月発行42号が秋号本号、11月発行43号が新年号ウェブ、明年1月発行44号が冬号本号（銀華文学賞発表号）となります。同人雑誌優秀作は、41号夏号に挙掲載となります。

なお、建築中の住所は、すぐ隣に仮事務所を借りることができましたので、これまでと変わりございません。どうぞ安心して前と同じ住所にお送りください。電話番号も変わりません。2月1日をもって隣の仮事務所へ移ることにさせていただきます、また8月1日より、元へ戻る予定です。

それに伴いまして、定期購読料を1月よりこれまでの年7000円から、年6000円に値下げさせていただきます。諸物価が下がっております事情を考慮するとともに、今後もよりいっそう多くの方々に読んでいただけるよう6000円の値段でやっていく努力をしたい所存です。またすでに定期購読料7000円をいただいております読者の皆様には、1号分を先に送ることで御海容を願えましたら幸いです。

いろいろ御迷惑をおかけしますが、どうかよろしくお願い申し上げます。御寛容のうえ、今後とも「文芸思潮」を御支援くださいますよう、心からお願いするしだいです。

2011年1月20日

アジア文化社 代表

渡辺政義

「文芸思潮」編集長・発行人

五十嵐勉



## 死んだ男

丸山 史



たつぷりとした肉を背負った丸い背中を見せて、坊さんがお経を詠んでいます。正座した足袋の足裏が重そうな黒い尻に押し潰されて、いかにもげんなりとして見えました。意味は知らないのですが、門徒であった実家の仏間で、子どもの頃に聞き慣れた旋律が静かな部屋に流れていました。マンションの十三階にあるこの部屋には、開放されたベランダから、八月とも思えない涼しい風も吹いてきます。

仏壇の横に置いてある黒枠の男の写真に視線を移しました。写真の男は、娘の父親と別れたあとにわたしが寝た四人目の相手です。十年続いた娘の父親よりも、長い付き合いになった男でした。娘の父親と暮らしていた頃、のちに自分が幾人もの男と性交することになるなどとは、思っ

もみないことでした。別れてから二年ほどは、わたしはまるで男の身体を必要としませんでした。多分、わたしという女にとって、状況の激変に気持ちを馴染ませるのに、それだけの年月が必要だったということなのでしょう。二年という年月が多いのか少ないのか、わたしには分かりません。ただその長さが、自分の身にびったり合っていたことを、わたしは実感しました。

こんなことを言ったら嗤われるかもしれませんが、娘の父親と別れるまでのわたしは、そう簡単に不倫など起こるはずがないと思っていたのです。不倫はテレビドラマのフアッションにすぎず、わたしにとって、現実の生活はもっと堅実に営まれているはずのものでした。わたしの離婚は

今から三十年ほども前のことであり、母子家庭というものも今よりずっと少ない時代ではありましたが。

ところが、娘との二人暮らしの家という基盤が固まって落ち着くと、不思議に男が寄ってきました。初めの男は、同じ高校で働く同僚教師でした。次は家を改修した際の工務店で働く年下の大工。その次は、友人の出版記念パーティーで知り合った一回り年上の小劇団の座付き劇作家。みんな妻子を抱えた男でした。人間の男も雄であり、あらゆる動物の雄同様に、できる限り多くの雌と交尾したがるものなんだと、わたしは深く納得しました。ただ人間の雄は、他の動物の雄と違って、交尾はしたいが子孫が増えては困るのです。

多くの男は浮気心を持っていて、性交の相手を求めている者どうしの嗅覚が働いて、いつの間にかそんな関係になってしまふのです。どの男とも二年ほどで終わりました。二年も続けば十分です。人生の共同目標もなしで、手順が知れている性交をいつまでも繰り返すなんてとてもできません。家は娘と暮らす場所であり、他に家など欲しくなかったのです。男と一緒に掲げたい目標など、わたしには何もありません。しかし、男の身体は欲しかったのです。

わたしのような女を世間では、下半身のだらしない女と決めつけるのでしょうか。三十半ばのわたしは単純に発情していたのです。娘との暮らしを平穩に過ごすために、自

分の中に溜まった欲情のガス抜きが必要でした。この時ほど、自分が動物だと実感したことはありませんでした。わたしは自分のバイオリズムに、ただ素直に従っていただけなのです。それでも、娘との現実生活を壊さない相手、母親の鋭い勘で慎重に選ぶことだけは忘れませんでした。

そして四人目が、黒枠に収まっている写真の男でした。男はわたしと同じ高校の一年先輩で、学生時代のクラブ関係で顔見知りでした。わたしと再会したとき、男は勤めていた会社を辞めて小さなデザイン事務所を立ち上げたばかりの頃でした。わたしも男も独身で、しかも結婚という形を望んでいませんでした。二人で持つさしたる目標もなく、俗に言う馬が合うというのに任せていると、関係は二十年近くになってしまったのです。しかも、再会したのが不惑を幾つか過ぎた頃であり、わたしの中にあつた欲情は、するべきことはもうしたとばかりに、穏やかな熾かざになって横たわっていました。もちろん、熾というやつがくせ者であることを承知しています。新鮮な風が吹き込めば、また赤く燃え上がることもあるのですから。しかし、男が自殺という動かしようのない事実を突きつけて去ったいまとなつては、わたしは男との二十年近い歲月の前で、しばらくじっと立ち止まるしかないのです。

写真の中の男は、五分刈りの四角い顔で、さも不愉快だというような眼差しをこちらに向けています。男が五分刈

りにするようになったのは、三年ほど前のことですから、写真はこの三年内のものと思われれます。また、その時期は男が川柳というものに激しく<sup>ま</sup>填っていた時でもあったのです。それに填ることで、男は生き延びようとしたのでしようか。写真に映されるのをことのほか嫌っていた男を、この誰が撮ったのでしょうか。たぶん、自分たちのことを柳人と名付けている人の誰かだとわたしは思っています。

俳句を詠む人は俳人、歌を詠む人は歌人というのは知っていました。それに做ったのか、川柳を詠む人のことを柳人と呼ぶらしいということ、男がくれた川柳結社のパンフレットで知りました。りゅうじんと眩くと、わたしの頭に浮かぶのはあの雨や水をつかさどる海神としての童神だけですが、自分たちに特別な呼び名をつける人の集団を、わたしは苦手でした。

誰もがかぶったバブル不景気の余波に溺れて、生命保険でチャラにして死ぬことばかりを考えた。その時、和菓子屋の二階で川柳と出合った。あきらめの眩きが句に変わり、その中に投げ込んだ自分を横から見ようと、藁ではなく柳を掴んだ。

男の言いぐさによるとこうなるのですが、わたしも男が柳を掴んでくれて正直ありがたかったです。川柳に出合

わがままな申し出に、わたしはノンシヤランとした言葉を投げつけてやりました。

「そらしやないわ。諦めてもらわんことにはどもならん。生き残ったもんは、浮き世の義理やら決まりやらに、縛られてるんやさかい」

三十分程で経が止まりました。向きを代えて座り直した坊さんが一口茶を飲み、いま詠んだ経の有り難さを説明しています。その説明はわたしの耳には届かず、あれだけの経でいくらのお布施になるんやろ、とわたしは現実的なことをぼんやり思っていました。

ふと気がつくと坊さんの姿はもうなく、とうに八十歳を過ぎた母親の目がわたしに注がれていました。わたしの方も、死んだ男が十歳の時からずっと、嫌悪と執着とが複雑に振れたような拘りを、抱き続けた母親の顔を見ました。母親の横に、男にとっては叔父にあたる母親の弟が座っていて、やはりわたしに目を注いでいます。二人の目の色から二人とも、わたしが何者であるかをすでに知っているのが分かりました。

その日は、男が死んでちょうど一年目にあたる法要日なのでした。わたしは葬式にも骨拾いにも行かなかったのです。妻という名の付いていないわたしは、浮き世の義理とは無縁であることを選びました。それ以上に、知っている人や初めて会う人も含めた何人もの他者と一緒に、男を弔

う前の一二年、時折り出てくる死んだら楽になれるのという男の言葉が、あけすけにいえば、わたしにはうとましくなっていたのです。資金繰りに苦しむ男にわたしが用立てたわずかばかりの金が、男の死を引き留める切り札になるはずありません。わたしにとって、梅であるのが柳であるのが、男の気持ちをととりあえず死から引き離してくれものならなんでもよかったです。

ずっと昔、ふさふさとした髪で、黒枠の写真よりもほっそりとした姿で、わたしと並んで映っている男の写真が一枚だけあります。つき合い始めて数年は、年に一二度小旅行に出かけました。その旅先で、ペンションの女主人に撮ってもらった写真です。多分わたしが無理に誘い、女主人も熱心に男を促したのでしょう。あからさまに不愉快な表情ではありませんが、困惑の色を漂わせた眼差しで映っています。男は旅先で何枚も写真を撮りました。そこには風景とわたしが映っているのです。男は自分が撮られるのを頑なに拒みました。レンズ越しに他者をじっと見つめるくせに、自分を見つめられるのを極端に嫌った訳を、いつか聞いたたさうと思っていたのに、その機会をわたしはもう持てません。

写真に撮られるのも不愉快だが、いまこのように自分の写真が飾られて、経など詠まれるのもつと不愉快だ、と写真の中から男の目がわたしに向かって言いました。そのいたくなかったのです。だから、男の口からしばしば語られたことのある母親と叔父の顔を、わたしはその日初めて見ました。二人とも男とは正反対の細面の顔で、その顔の中程にすらりと形の良い鼻があり、若い頃はさぞかし美しい女と男であつたらう、と思わせる片鱗が残っていました。

「へんこな子でしたやろ」

三味線と新内節という商売道具を持って、十代で戦中の満州に渡ったという母親の声は、八十の坂をとうに越えたいまも、どことなく艶っぽさを感じさせました。「へんこ」とは片意地を表す大阪弁の「へんこつ」を縮めたものです。「そうでしたね……」

わたしはその艶っぽさに惹かれて<sup>あひづち</sup>相槌をうっていました。男は大学院を出たあと、どこかの大学で研究職につくつもりでいました。わたしにはさっぱり縁のないデザイン工学という分野でしたが、思う大学に空きがないまま、空きができるまでの腰掛けのつもりで市の広報課に入りました。大阪万博を数年後にひかえて、男もそこで専門分野の能力が出せた時期だったらしいのです。万博が終わってしばらくすると、腰掛けのはずだった仕事はもう六年にもなっていました。

そして男はある日、これまでまともに見もしなかった給与明細表に、訳の分からない手当があれこれ付いているの

に気づいたのです。それを見たたん、男はいまいる場所に居心地の悪さを感じました。

「訳もわからん手当がごちゃごちゃ付いては、気色が悪うてしようがないがな」

男の言葉をかりればこういうことでした。男は仕事を休みました。昼間はアパートで眠り、夜は新世界界隈で酒を飲みました。高度経済成長の最中の新世界は、活気に満ちていたそうです。釜崎には仕事を求めて、西日本の各地から人が集まって来ていたといいます。どこから来たとも知れない労働者と肩を並べて飲んでいると、緊張がふと緩み、ふわあと子どもの頃のことがかんたたりしたと言いました。

子どもの頃、友達の家でおやつ菓子などが皿に入れて出されると、尻の下がむずむずして、じつとそこに座っていることができず、皿をひっくり返して逃げだしたということです。普通の平穏な生活を強く求めているくせに、その中に身を置くとたまらなく恥ずかしくなって逃げ出してしまふのだ、と男が語ったことがあります。酒を飲みながらぼつりぼつりと出てくる話は、順序立てて出てくる訳もなく、その時々気分まかせといったものでした。

男の欠勤が一週間及以上頃、アパートに大学の先輩でもある上司がやって来て言いました。

「君の納得のいく処遇を用意するので、明日は背広にネクウことが分かりました。見果てぬ夢と策謀が渦巻いていた戦時中の満州で、若い女であった母親は、あらん限りの力で生き抜いたに違いありません。ストレスなどという言葉は、母親の中に端からありませんでした。

男は敗戦の三年ほど前に満州で生まれました。赤子は母方の祖母に抱かれて海を渡りました。そして、祖父母が男の戸籍上の父母になったのです。三人いた叔父を歳の離れた兄として十歳まで育ちました。十歳の時に生みの母親が母として男の前に現れたのです。それから母親との二人暮らしがはじまったということです。戦後の社会でも母親が生きていく商売道具は、三味線と新内節だけでした。

男と知り合って三年目に入り、性交が間遠になった頃から、ぼつりぼつりと男が話しはじめたのです。順序立てた話ではなく、寿司屋のカウンターの横に、見るともなく付いていたテレビニュースから聞こえてくる「中国の吉林省」などの声に押されたみたいに、いつも男は話し出すのです。

「俺は満州で生まれたんや」  
そして、続きを聞こうと待ちかまえているわたしを置き去りにして、男の気分次第で話は宙ぶらりんで終わります。わたしはレンズ越しに真つ直ぐ見られなかった男のことを、肩を並べて酒を飲みながら、男の語る言葉から見ようとしていたのかもしれない。そして、男の口から語られる母

タイで来るように」

その市では、昇進するときには背広を着てネクタイを締め、市長から昇進の辞令を受け取るようになっていたらしいのです。上司は男の欠勤の理由を、処遇への不満なのだと判断したのでしょう。四十年近く前の話ですが、公務員とはずいぶんと気楽な状況に置かれていたものです。男は当日ネクタイは締めず、辞職願いを提出したということです。母親からすると、それこそ訳の分からないことで将来の安定を棒に振った男は、単なる片意地な変わり者でしかなかったのでしょうか。

「そうですね。ほんまに、へんこなところありましたわ」  
わたしは母親の問いかけに、もう一度応えてこう言いました。

「あの子の父親は、上背の大きな男でしてんで。お前もよう知ってるやろ」  
こう言うと、母親は傍に座る弟の顔を見ました。

一メートル六十センチあまりの男は、当時の若者の中では小柄でした。成長期に過剰なストレスを受けた子どもは身長が伸びない、という文章をどこかで目にしたことがあります。男が会ったこともなく、戸籍の上でも父子関係にもなっていない男の父親のことを、母親は懐かしげに語っています。男のあの四角い顔は、父親譲りの顔だったとい

親のことを、なぜか心待ちにするようになっていました。三人いる弟の誰一人として頼りにならず、つい歯痒さになりと鉢巻きを締めて、自分が頑張ってしまう母親に、わたしはいつの間にか惹かれていたのです。

土曜の昼過ぎ、久しぶりに新世界で飲もうと出かけ、飲む前に気紛れに入った動物園のことでした。爬虫類館の蛇の前に立ち止まり男が言ったことがあります。

「はじめて母親と二人で住んだ文化住宅は、名前は文化でも非文化的な部屋やったわ。薄いベニアの壁で仕切られて、隣の声も筒抜けでなあ。俺、窓ガラスの上に画用紙に描いた蛇の絵を三枚も貼ったんや。母親がえらい気持ち悪がつてなあ」

「気持ち悪がらはったあと、その絵どないだったん」  
「さあな……。忘れてしもたわ」

母親とのやり取りを、男が忘れるはずがないのです。いくどもいくども小さな頭の中で反芻したに違いないのですから。だから、男が語る母親をわたしの身体は生々しく感じられたのです。やがて、男の口から語られた順不同の事柄を繋ぎ合わせ、わたしなりの『母親と息子』の物語を作ったのです。ひとり娘と暮らしてきたわたしにとって、母親と息子、それも息子が十歳の時から母子になった特殊な二人の関係は、まるで浄瑠璃の世話物を見ているようで、妙に引き込まれてしまったのです。

戦争が終わったあと、男が十歳になるまでの間、母親がどこで何をしてたのかを男はわたしに語りませんでした。そこについては語りたくなかったのか、それとも、子どもだった男には、知るすべもないことだったのでしようか。

「顔つきも色白なところも父親似やのに、上背だけは、なんであないに違ごうたんやろ」

母親はもう死んでしまった男の上背が、父親似でないことがどうにも不満らしいのです。

そんな母親の姿はわたしの目には、昔の男にいつまでも情を掛ける、年増女のようにも見えました。

「ほな、すんまへんけど場所変えてもらいますわ。夏は鱧でっさかい、近くの店に用意してまんねん」

そう言うとき母親が腰をあげました。平日のその日、法要に参列する人の数は少なかったのです。学生時代の友人たちも川柳結社の人たちも、その週の日曜日に来られたと母親から聞かされていました。母親の従兄弟とその娘、男の仕事関係の人が四人、そして母親にすがって生きている男の叔父とわたしだけでした。

男と最後に食べたのもやはり鱧でした。七月の梅雨時に、つかの間晴れた土曜日の昼過ぎでした。三十半ばになるわたしの娘も一緒でした。仕事は男とはまるで違うのですが、高校、大学と絵を描き続けていた娘が、男と美術館や映画

にわたしの前へ座りました。

「あんさんも、あの気難しいのと付き合うのに気骨が折れましたやろ」

その物言いは、もうこの世にはいないからこそいとおしめる、息子をくるむように優しく、わたしの深いところに沁みました。が、すぐにさばさばとした表情に戻り「さあみなさん、どんどん飲んどくなはれや」と、今にも三味線を弾き出しそうな気配すら見せています。その甘草や口振りは男のそれを見るようで、わたしはしばらくの間呆然として、母親の姿を見ていました。

あれはどこのお店だったのでしようか。旅先の宿で向かい合って食事をしたこともあったのに、なぜか男と一緒の場面で目に浮かぶのは、二人でカウンターに並んで酒を飲む後ろ姿ばかりです。冬の寒い日でした。それぞれが手酌で熱燗を飲んでいました。男もわたしも人に注がれるよりも、自分のペースで飲むのが好きでした。どんな話の流れからそこに至ったのかはまるで覚えていません。例によって男が小さな声で話し始めたのです。

「母親が男に背負われて、夜中に帰ってきたことがあったんや。あのベニアの壁で仕切られた文化住宅に住んでた頃やったわ」

「酔い潰れはったんやわ。なんというても商売が三味線なんやから、そんなことがあっても不思議はないよ」

館に行くようになったのは高校三年生の頃からです。男は娘と二人で、母親のわたしのことをこきおろすのが好きでした。あの嬉しそうな表情を、多分わたしは、痴呆老婆になっても覚えているのではないでしようか。

醤油味の出し汁をたっぷり張った大きな鍋の中に、五ミリほどの中でスライスしたタマネギが美味しそうに煮えていました。大皿に盛った白い鱧を入れながら食べていくのです。

「夏はなんというても鱧やで。天神さんの祭りが来たら値えが上がるさかい、今の内によくさん食べとき」

小さい子どもに言うように、娘にこう声を掛けながら、いつもの鍋奉行は自分は少しだけ食べて酒ばかり飲んでいきます。娘と三人で鍋を囲む時はいつもこんな風でした。わたしたちにさんざん食べさせたあと、男は事務所へ帰ると言って自転車にまたがりました。土佐堀川の川風に吹かれながら、遠ざかる後ろ姿をわたしの目に残したまま男は消えてしまったのです。

母親が先に立って歩く後ろを、法要の参列者はぞろぞろと付いていきました。行き先はマンションに近い割烹料理の店でした。

「この鱧、ちょっといけませ」

母親はこう言うと、席に着いた者にビールをついでまわりました。そして、一人一人と言葉を交わしながら、最後

「隣も母子家庭でなあ。子どもが三人いて母親は近くの工場で働いてた。その日は母親の給料日でお数はコロツケや。あの当時コロツケはご馳走でなあ」

「そうやったねえ。うちでも一番年上の姉が、給料日の仕事帰りには必ず買ってきてたわ」

「ベニアの壁越しに聞こえてきてなあ。家族で食べる姿が見えるようやった」

男は隣の家の物音に耳を澄ましながら、冷たい布団に潜り込んだのでしようか。男の話聞きながら、わたしは昔の自分と娘のことを思い出していました。

小さい娘に早めの夕食をたべさせて、わたしは年下の大工に会うために気が急いでいました。夜更けに帰ってくる時、小さい娘は、自分のベッドの置かれた部屋だけでなく、風呂場もトイレも台所も居間もわたしの寝室も、すべての場所に電灯を付けて、小さな顔を明かりに晒して眠っていました。

「母親が男に背負われて帰ってきたとき、俺は寝た振りしてたんや」

母親を背負ってきた男は、側で寝ている子どもの寝姿をたしかめて、母親と事に及んだのでしようか。それとも、事無しに終わったのでしようか。

わたしは、男や娘がその時抱いたであろうひとりぼっちという感情に、自分の気持ち添わせながら、もう一方で

生身の女であった母親に、心を奪われていたのです。そして、母親に姉妹にも似た親しさを感じていました。

大学入学と同時に家を出た男が、再び母親と暮らすようになったのは、三十半ばの頃でした。子どもの頃の男にとっては、実母同然であった祖母の死がきっかけでした。母親がその死をきっちり看取ったことで、男の心は動いたらしいのです。

葬儀の日から一週間ほどして、わたしは男の学生時代の友人からの電話を受け取りました。彼も高校時代のクラブの先輩です。

「酷たらしい死にようで、男の俺でさえ涙が出てしようがなかったのに、お母さんは妙にさばさばしてはってなあ。

帰りに一緒に飲んだ男どもは、みな不思議がってたわ」

電話口でその日の母親のことを彼はこう語りました。男たちは母親というものに、特別な思い入れがあるようです。男たちの感慨などど吹く風といったかんじで、今日の母親も軽やかに注がれたビールを飲み干しています。

二時間足らずで散会となりました。その日のわたしには、もう一つ行くべき場所があったのです。一年前に、男が巨大な鉄の固まりに向かって、身を投げ出した踏切です。農道の間にある小さな踏切に行き着く地図を、その日の法要にも来ていた、男にとっては片腕と言える職場の人が描いてくれていました。

きでした。お前ら、じっと仕事をしている場合かと怒鳴られました……。そう言われても、田島さんの気質を思うと、僕らが探し回ったらどんなにか嫌だろうと、川柳の人たちのように熱くなれなかつたんです。

それでも川柳の人たちの熱に押されて、みんなで手分けして田島さんがよく利用していたビジネスホテルに電話を掛けてまわったんです。個人情報の問題が絡むので警察に協力してもらい、九時少し前に、博多のホテルに田島さんらしい人が泊まっていると突き止められました。それで、川柳の会の一人が最終の新幹線で駆けつけられたんです。

そこまで聞いたとき、わたしの胸は切なさに押し潰されそうになりました。自分に向かって真っ直ぐに駆けつけてきた川柳男を、男はどんな思いで受け止めたのでしょうか。男が感じたであろう身の疎むような恥ずかしさが、わたしの心に直に流れ込みました。次の日の夜遅く、男は川柳男と一緒に大阪に帰ってきたそうです。男のことですから、冗談をまぶした言葉を残して川柳男と別れたのでしょうか。その日は土曜日でした。死んだらあかん、死んだらあかん、とまさか口には出さないけれど、熱い思いで連れ戻された男には、死ぬしか道はないではありませんか。川柳男が熱くなって駆け付けさえしなかつたら、男はいまもリュックを背中に、九州のどこかの道を歩いているかもし

これまで何度も三人で会っていた片腕の男から、男が死に至る数日間のことを聞いたのは、男の死から三ヶ月が過ぎた頃でした。

「驚かれたでしょうね」と片腕の男は語り始めました。

亡くなられた五日前の朝のことです。会社に行く、いつも一番に来られているはずの田島さんの姿はなく、僕の机の上に手紙が置いてあったんです。仕事のことを詳しく記したうしろに、ちよつと付け加えるようなかんじで、勝手をさせてもらってすまない、とだけあつたんです。この二十年ほど、他の者は色んな理由で仕事を休んでいるのに、田島さんは、休日でも事務所に出たはつたんです。一番しんどい資金繰りについては、田島さんに頼り切っていました。事務所を二十年前に立ち上げたのは三人だったのに、すっかり年上の田島さんに甘えてしまっていたんです。立ち上げた事務所は三年ほどで軌道に乗り、社員も十数人に増えました。パソコン中心の仕事になり、田島さんが不在でも、仕事を進める上では困らないんです。必要な時には携帯で連絡も取れますし、しばらく骨休めをしてもらおうと、僕は気楽に考えていたんです。

田島さんが休まれて三日目の夕方でした。会の集まりに顔を出さないがどうしたんだ、と川柳の仲間の方から電話が入ったんです。事情を話しますと、それからが大変な騒がないのです。こう思うのは、わたしの勝手な思い込みなのでしょうか。

「そんなしおらしい振り、あんたには似合わへんで」

男の声がどこかです。わたしは、会えば死にたいと口にする男のことを疎ましく思い、男が柳を掴んでくれて、有り難いと思った女なのですから。

土曜日の夜、川柳男と別れてから日曜日のその時間まで、男がどこで何をしていたのか、どの道を辿って農道の小さな踏切に行き着いたのか、わたしには分かりません。

その日、男が亡くなった時間に、わたしは街を歩いていました。ある合唱団の歌を聴き、その後で一緒に行った友人とビールを飲み、いい気持ちになって街を歩いていたのです。暮れなずむ空に、刷毛ではいたような薄い灰色、桃色、橙色の雲が層をなして漂っていました。時の経過に連れて、西の空が朱色に染め上げられていきます。やがて、深い藍色が空を覆い尽くしました。わたしと友人は、長い橋の中間に立ち尽くして西の空を見つめていたのです。その同じ頃に、男は巨大な鉄の固まりに身を投げ出したのです。男の身体は朱色に染まって、辺りに散らばったのでしょうか。

わたしは法要の参列者と別れて、一人で奈良に向かいました。

近鉄電車で西大寺という大きな寺のある駅まで行き、そ



こで三両連結の小さな電車に乗り換えました。そして、地図が示す五つ目の駅で降りたのです。初めて下りるその駅で、わたしの頼りは手にした地図だけです。改札を出て左へ少し進むと商店街の入り口らしいものがありました。昔からあった旧街道なのでしょう。道幅はそれほど広くなく、高いところに吊された横長の看板に、わずかに商店街の名前が薄れたペンキの文字に残っていました。そこは、わたしの住む地域にもあるシャッター商店街でした。ところどころに錆びが浮き出たシャッターが下りています。パン屋、花屋、履き物屋、シャッター、寿司屋、豆腐屋、シャッターといった具合です。それでも商店街の入り口に近い辺りは開いている店も結構あるのですが、奥に進むほどシャッターが増えていきます。この道を男も歩いていたのかもしれない。

男と一緒に電車に乗っていても、気紛れにふらっと目的もなく、見知らぬ駅に下りることがよくありました。そして、初めての道をぶらぶらしながら「ここは皆さうやで」と、暖簾を潜るのが好きでした。「俺の鼻はよう利くんや」と男が言ったように、男の選んだ店に外れはめったにありませんでした。川柳を始めてからの男は、そんな風にわたしと出かけることはなくなっていました。その代わりのように、いくつもの句を書いたハガキや手紙がわたしの家に届くようになりました。熱心な読者でないわたしには、そ

の都度の感想なんて書き送れません。ただ読んだ印として、短い文章を添えた絵葉書を、たまに事務所に出していただけです。

商店街らしい道は右に曲がりながらだらだと続いていきます。やがて地図にある風呂屋の煙突が見える辺りに、入り口にあったと同じ横長の看板が高いところから吊されています。ここが商店街の終わりということでしょうか。風呂屋は幅広な道路に接していて、その道をブルブルと音を響かせたトラックも走っています。この辺から車が増えてきました。辺りには背の高い建物は一つもなく、広い空がわたしの目の前に広がっています。どうやらわたしは西に向かつて進んでいたようです。曇り空ですが、重なる雲の隙間からわずかに西に傾く日差しが感じられました。トラックが行き過ぎた道路をわたしは走って渡りました。ずっと離れたところに信号がありましたが、道路法規を守って、道を行ったり来たりするわけにはいきません。すっかり陽が沈まぬうちに、あの踏切に行き着かねばならないのですから。

平屋の家が続く道をわたしはどんどん進みました。地図にあった目印の赤いポストが立っているのが見えました。ポストの横にくねくねとした細い路地が家沿いに延びています。その路地を進んで行くと、家の裏側はどこもかしこも畑と溜池でした。畑と溜池の間を農道が枝分かれして延

な声を上げました。

「ああ、思い出しましたわ。ばけつ持った電車の人らがこの溜池に落ちてしまつたら、もう探しようがないなあ」て言うたはりましたわ」

わたしは、踏切の中を走っている無表情なレールを見つめました。男の肉片は、とうに金魚に食われてしまったというのでしょうか。幾つもある溜池は、静かに澱んだ青緑色の水を湛えています。水底に、濃い緑色の水草が、びっしりと生えてでもいるみたいです。水の面には金魚の姿はどこにも見えません。じっと目を凝らすと、時折、赤い線のようなものが微かに視界を横切ります。

灰色の厚く重なる雲の隙間から、すっかり西に傾いた夕陽の光が微かに射して、雲の縁をわずかに淡い朱色で染めています。辺りが薄暗くなってきました。

「あつ、コウモリ」

子どもの頃、夕方になると何処からともなく飛んできたコウモリが、この辺りにはまだいたのです。忙しく飛び回るコウモリたちは、生きるために小さな羽虫を取っているのでしょうか。男は死ぬ前に、このコウモリを見たのでしょうか。

カン、カン、カン、カン、乾いた音を鳴らして目の前の遮断機が下りました。すぐ側を、見馴れた八両連結の快速電車が、ゴォーという音を立てて走り過ぎました。光の固

びています。すこし離れたところに線路が走っていました。さっきわたしが乗ってきた三両連結の電車とは違う、見馴れた電車が通り過ぎました。わたしの家から奈良に行く時にいつも乗るJRの電車なのです。枝分かれした農道の一つを選んで進みました。農具を入れた小さな小屋のところで行き止まりになっています。元に戻って隣の道を行くと、それは少し広い道に繋がっていました。道の脇に一軒の農家が建っていて、その前を行きすぎると前方に踏切が見えました。まだ明るさの残っている空の下で、畑で働いている夫婦ものらしい二人にわたしは声を掛けました。

「ちょっとお尋ねしますが、去年の今頃、電車に飛び込んだ人がいたんですが、あの踏切でしようか」

「そうやなあ。そんなことあったかいなあ」

男が横で鉄を動かしている女の方を見ました。

「そうでしたなあ。パトカーも来て、警察の人や電車の人が、暗うなつてもうろうろしたはりましたわ」

鉄を持つ手を止めて、女が踏切の方に目をやりました。

「この辺りは溜池が多いんですね」

わたしは辺りに目をやってみました。

「この辺では堀言いますんや。あの中に、ようけ金魚がおつてなあ。ここらは金魚の商売してるもんが多いさかいに」引いた野菜を束ねて結わえながら、男はまるで独り事でも言うように小さく呟きました。その時ふいに、女が大き

まりが行き過ぎると、こちら側から見える踏切のあちら側は、藍色の紗を下ろしたように暗さが際立っています。そこに、顎の張った四角い顔の男が立っていました。わたしは真つ直ぐ男を見ました。男はまたよたよたした足取りで、こちらに向かつて歩いて来ます。わたしの側まで来た男は、顎が張るところか、小さく痩せて単に骨張っているだけなのです。男は首に、薄汚れた包帯を巻いていました。

「すいませんが、あの、J Rの駅へ行くには、どう行けばいいのでしょうか」

線路の上を遠く指差して、わたしは骨張った男に尋ねました。線路沿いに道があれば、わたしの足で三十分ほどで行けそうな気がします。もちろん、畑と池ばかりのこの辺りに都合の良いそんな道などありません。

「ここ取ったさかいに、俺、声のでえへん」

骨張った男は自分の喉の辺りに手を当てながら、かすれて、息が漏れたような声を懸命にだして、それでも、応えてくれました。

「歩いて行くのん」

呆れたように目を剥いて、男は自分が来た道を指差しました。

「真つ直ぐ言ったら信号がある。その県道を右に真つ直ぐグフューという不思議な音を残して男は黙りました。も……」

わたしが着た薄いジャケットの胸の辺りが、風を孕んで膨らんでいます。この風に吹かれていたら、このまま夜明けまでも歩いて行けそうな気さえました。県道沿いには池はなく、畑や田圃ばかりの中に、たまに四角い倉庫のような建物があります。でもどの建物にも人の姿は見えません。遠くに信号が見えました。あの信号に行くまでに、車二台とすれ違ごうたら、あそこを曲がる。わたしは気紛れにこう決めました。信号の手前で珍しく、二台続けて走って来た車とすれ違い、わたしはその信号を右に曲がりました。携帯電話も時計も持っていないわたしには、時間はまるで分かりません。あの踏切を渡ってから、どれほどの時間をわたしは歩いているのでしょうか。風に吹かれて、かすかにシャリシャリと乾いた音を立てて、稲穂が鳴っています。

寄り添った影が身をゆするのをわたしは感じました。輪郭も定かでないくせに、影はリュックのような物を背負っているみたいに見えます。

種田山頭火みたいになあ……なにもかも捨てて……どこまでも……

川柳の会に行く時はいつも、男はリュックを背負っていました。やがて俳句の句集にも手を伸ばし、ことに自由律俳句を詠んだ山頭火に惹かれていました。

うこれ以上声は出ないと、男の身体が言っています。わたしは頭を下げて、踏切を渡り、男が指差したあちら側に歩き出しました。そこも畑と池だけの道です。吹く風に雨の気配はありませんが、空はすつぽり灰色の雲に覆われています。骨張った男が言った県道の信号に行き着くまで、わたしは誰にも人に出会いませんでした。

県道は車道と人道に分かれていて、等間隔に立つ電柱の上から黄色い光が地面を照らしています。わたしが歩く前にも後ろにも、人の姿はまるで見えません。車でさえ、たまにしか通らないのです。さつき、線路の遠くに見えていた駅に行き着くには、どこら辺りを曲がればいいのかでしょうか。このまま永久に駅にたどり着けないのではあるまいか。わたしの心に小さな不安がよぎりました。とうに夕暮れは過ぎ、辺りには夜の闇が広がっています。

ふと気がつくと、風が運んできたかに見える淡いなつかしい影のようなものが、わたしに寄り添って立っています。風の中から、稲の受粉時の濃厚な匂いが漂ってきます。米が炊きあがる寸前に出てくる、むせ返るようなあの香ばしい湿った匂いです。かすかに輪郭を保っている影は、どうやら男のように見えました。

ああ……えー風が吹いてきたなあ。小さい時、八軒長屋の赤茶けた畳の上で、おじいさんと昼寝してた、あの時の風や……。あれが幸せいうもんやったんやなあ……。

あほらし。のたれ死にする勇氣もなかったくせして。手でさつと払えば霧散しそうな影に向かって、わたしは無慈悲に呟いたのです。そのくせもう一方で、熱くなって男を探し出した川柳男を恨みに思っているのです。川柳男が追いかけて行きさえしなかつたら、男は山頭火を夢見ながら、いまま九州のどこかを歩いているかも知れないのにと。放浪し続けるなんてことは、女のわたしにはとても出来ないことです。でも、放浪を続ける男を待つことならできそうな気がします。川柳を始めてからの三年ほど、月に一度くらいしか会っていない男のことですから、男が長い旅に出ているつもりになることなど簡単なことです。長い旅に出た男をたまに思い出し、胸に兆す悲哀の芽を感じることもあるかもしれないけれど、きつとわたしは大方を、平穩に生きていような気がします。

田圃と畑が広がる前方左手に、どうやら賑らしい明かりが小さく瞬いています。しかし、歩いても歩いて、わたしの距離は近づきそうに思えません。時折思い出したようにシャリシャリ、シャリシャリと、かすかに稲穂の囁きが続いています。数時間前に別れたばかりの男の母親と会って、死んだ男のことを無性に話したくなりました。二人が会えば、男のことなど脇に置いて、まず女二人の来し方を、陽気な表情を頭わにして話すのではないのでしょうか。わたしには、そんな気がしてならないのです。



丸山 史

まるやま ふみ

昭和61年度女流新人賞受賞  
『夜と霧』感想文優秀賞受賞  
第6回銀華文学賞奨励賞受賞  
第3回文芸思潮エッセイ賞優秀賞受賞

## 受賞の言葉

丸山 史

十一月半ばを過ぎると、わたしの心は少しざわざわする。六月半ばに『死んだ男』を書き終えた時は、書くべきものは書いたと、妙にさっぱりした気分だったのに。郵送した後は、もう相手方の判断に託すだけと、心に決めたはずなのに。この小さな「ざわざわ」は、わたしの中に今もある欲望の蠢きであろう。

六十年安保を高校時代に体験し、右肩上がりの高度経済成長時代の中を走り抜けて生き、今、六十半ばを過ぎたわたしにあるのは、生きるかなしみである。物があふれている中に暮らしながら、誰も幸せそうな表情をしていない今という時代の中で、生きるかなしみを杖として立っているような気持ちがする。肥大する欲望にまみれて生きていた時も、傍らに生きるかなしみがひっそり立っていた。

わたしがただ目を背けていただけで。愚かなわたしは、それに目を向けると前進する予先が鈍るとでも思っていたのだろうか。その愚かしさに気づかされたのは四十九歳の時だった。心臓の手術をし、その直後こころを病み、一年近い長い闇から抜け出た頃である。

四十九歳から六十七歳までの十八年間、わたしは自分の小説に向かっていた。その前の十六年ほどの間も小説を書いてきた。小さな新人賞をもらい雑誌に幾編かの小説が掲載されたこともあった。しかし、自分の小説だと思えるのは、人生の後半、生きるかなしみを見据えてからのものがある。

こんなわたしに書きつづける気力を与えてくれたのは、「文芸思潮」の存在だった。優秀賞をありがたうございました。今後も、作品を他者に読んでもらいたいというささやかな欲望を握り締めて励んでいきたいと思っています。

## 表現力を鍛えよう！

作家集団「塊」プロ作家による  
作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします  
**懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!**  
飯田章(群像新人賞)・八覚正大(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・小沢美智恵(蓮如賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞/インターネット文芸新人賞)・都築隆広(文學界新人賞)・佐々木義登(三田文学新人賞)などプロ作家による添削指導

「文芸思潮」の読者には特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

## 詩

1篇 3枚以内 3000円

## エッセイ

1篇 5枚以内 4000円

10枚以内 5000円

## 小説

1篇 20枚まで 7000円

50枚まで 10000円

100枚まで 15000円

200枚まで 20000円

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

●ご希望の方には案内所を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

## 作家集団「塊」事務局

〒158-0083

東京都世田谷区奥沢7-15-13

アジア文化社内

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

asiawave@qk9.so-net.ne.jp